

第 1 章

歴史的風致形成の背景

1. 自然的環境

(1) 位置

本市は、日本のほぼ中央で、東京と大阪のほぼ中間点に位置している。

静岡県内においても政令指定都市である静岡市と浜松市のほぼ中間点に位置し、東側は菊川市、島田市及び御前崎市に、また西側は袋井市及び森町に接しており、南側は太平洋に面している。

面積は 265.69 km^2 であり、東西に約 15km、南北に約 30km と南北方向に細長く、中央部がくびれた特徴的な形状となっている。



図 掛川市の位置

(2) 地形・地質・水質

① 山地・河川等

北部には、南アルプス最南端の八高山^{はっこうさん}をはじめとする山地があり、その南側に平地が開けている。中央部には、標高 264m の小笠山^{おがさやま}があり、その山麓は複雑な谷戸を持った丘陵地となっている。南部には、遠州灘海岸^{なだ}が東西約 10km にわたって続いている。また、中央部や南部に形成された市街地の周辺には、水田や海岸砂地畑、茶畑が広がっている。

本市には多くの小河川があり、大部分は太田川水系、菊川水系及び弁財天川水系の3水系に分類される。原野谷川^{はらのやがわ}や逆川^{さかがわ}などの掛川地区の河川は太田川に、牛淵川^{うしぶちがわ}や佐束川^{さづか}などの大東地区の河川は菊川に、西大谷川^{にしおおやがわ}や大須賀新川^{にしおおやがわ}などの大須賀地区の河川は弁財天川に合流して、それぞれ太平洋に注ぐ。

背後に高い山が少なく、森林の保水能力も低く、河川流量が乏しい環境にあったことから、本市の地形特性を活かし、山地や丘陵地の谷を堤でせき止める形で、多くのため池^{やだ}が築造されてきた。ため池と谷田（丘陵と丘陵の間の谷底の水田）は、先人の治山治水の努力によって受け継がれてきたもので、農業生産活動の場としてだけではなく、農村の原風景の保全、多様な動植物の生息の場などとして重要な機能を果たしている。こうして長い年月をかけて築き上げてきたものを本市では「ため池谷田文化」と言っている。

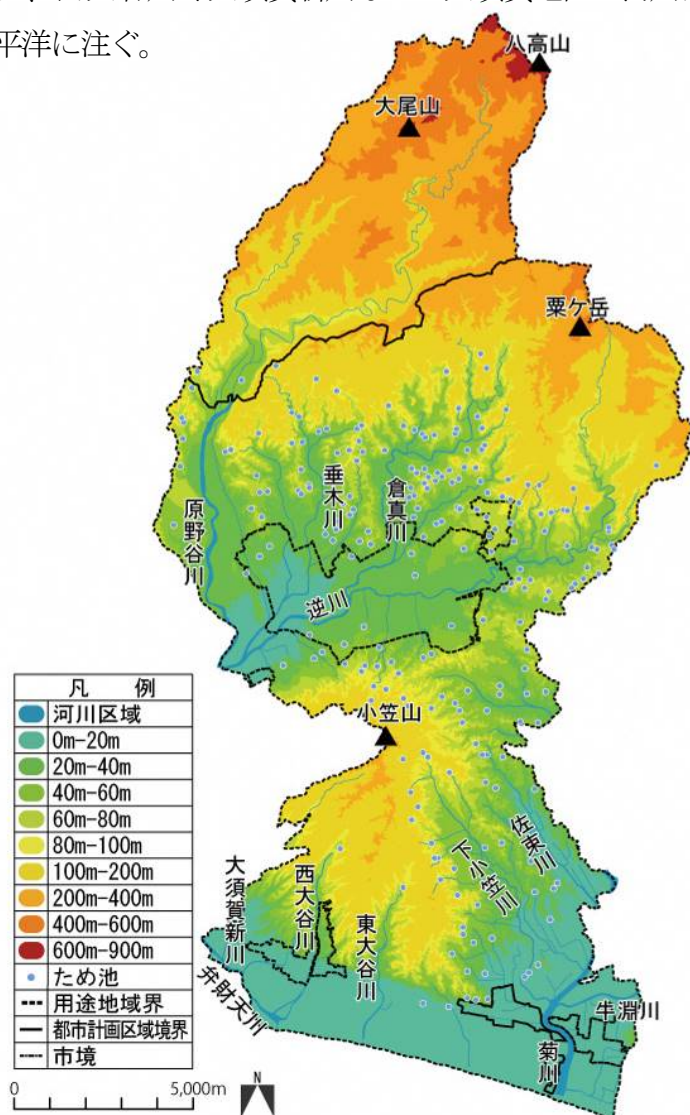


図 地形及び水系図

資料：平成 24 年度都市計画基礎調査、ため池台帳（平成 27 年 4 月 1 日現在）

② 地質

北部の山地は泥岩・砂岩・泥砂岩互層からなる三倉層である。その南には泥岩や凝灰質泥岩からなる倉真層、泥岩の西郷層、泥砂岩互層の掛川層群と続く。南部は小笠山礫層からなる小笠山丘陵、泥や細砂の多い曾我層群などからなる。

凡 例	
●	泥質地盤
●	砂泥地盤
●	泥砂礫質地盤
●	砂質地盤
●	礫～砂礫質地盤
●	低位段丘堆積物(礫層)
●	中位段丘堆積物(礫層)
●	高位段丘堆積物(礫層)
●	最下部洪積層
●	シルト岩、砂岩および礫岩
●	古第三系・白亜系

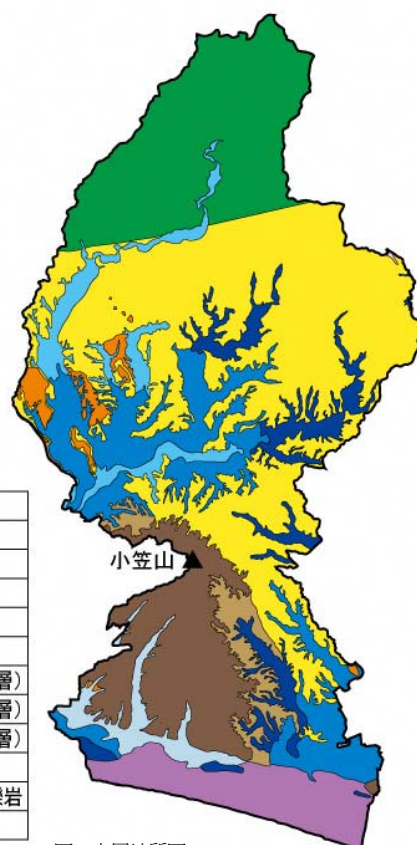


図 表層地質図

資料：静岡県地質情報マップ

(3) 気象

年間平均気温は 16℃前後と比較的温暖で、降水量は年ごとのばらつきはあるものの、過去5年間平均は1,910mm となっている。

夏季には高温多湿となり、蒸し暑い日が多い。冬季の降雪はほとんどないが、「遠州のカラッ風」と言われる季節風が連続して吹くことが多く、実際の気温よりも寒さを感じやすい。また、年間の日照時間は、全国平均よりも長くなっている。

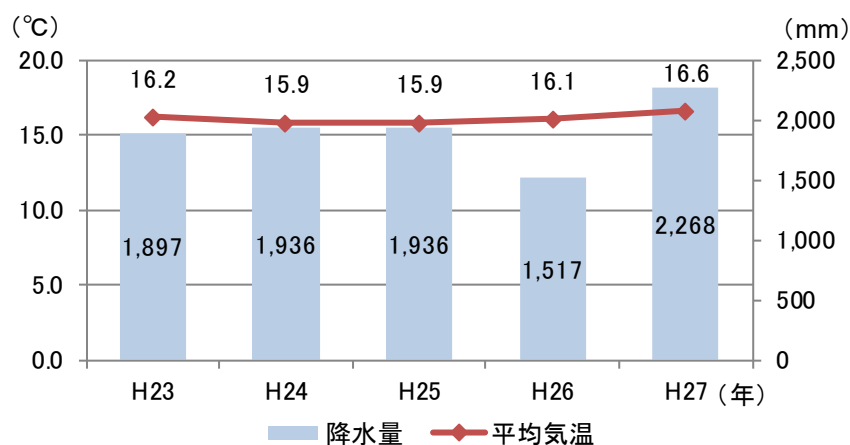


図 過去5年間の平均気温と降水量

資料：平成28年度版 掛川市統計書

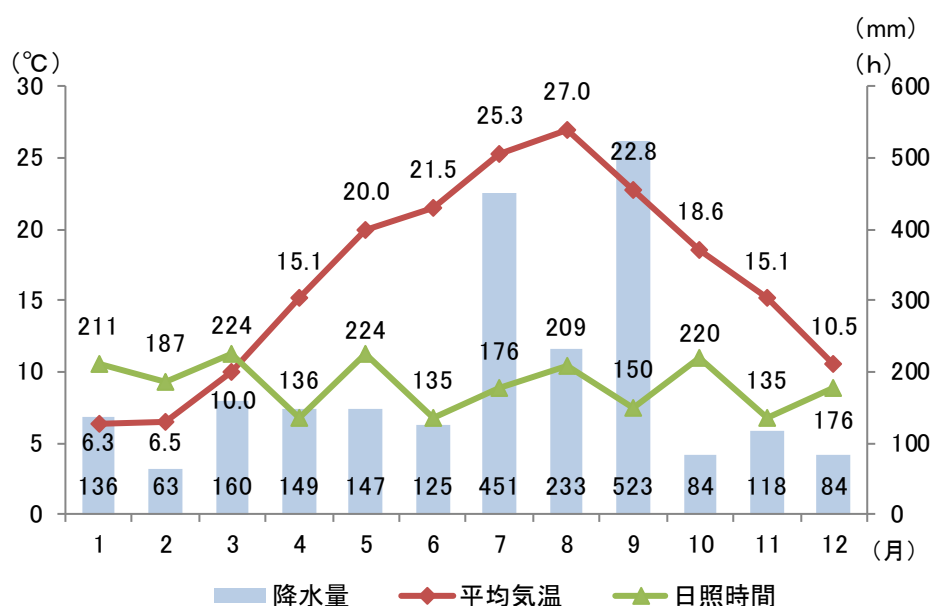


図 平成 27 年 (2015) の月別平均気温、日照時間、降水量

※日照時間の月合計は御前崎のデータ。
資料：平成 28 年度版掛川市統計書、気象庁

2. 社会的環境

(1) 土地利用

① 合併の変遷

本市は、平成 17 年 (2005) 4 月 1 日に、掛川市、大東町、大須賀町の 1 市 2 町の合併により誕生し、現在に至っている。

旧掛川市の区域では、明治 22 年 (1889) の町村制施行により、掛川町ほか 17 村が成立し、その後明治 28 年 (1895) に掛川町の一部が分立して西南郷村が発足した。大正 14 年 (1925) に大池村を、昭和 18 年 (1943) に南郷村を、昭和 25 年 (1950) に上内田村を掛川町に編入した。翌年、掛川町、西山口村、粟本村、西南郷村を廃止し、掛川町を新設、昭和 29 年 (1954) に曾我村、東山口村を編入し、小笠郡掛川町を「掛川市」とした。翌年、日坂村、東山村を、昭和 32 年 (1957) に北小笠村（桜木村、和田岡村の合併により昭和 29 年 (1954) に新設）、原田村、原谷村を編入した。さらに、昭和 35 年 (1960) に三笠村を編入し、6 万人を擁する市となった（昭和 35 年国勢調査）。



図 平成 17 年 (2005) の合併前の旧市町

旧大東町の区域では、明治22年(1889)の町村制施行により、大坂村ほか7村が成立した。その後昭和18年(1943)に佐東村は岩滑村と合併し、昭和30年(1955)に土方村と佐東村が合併し城東村が誕生し、翌年、中村が城東村に編入合併した。一方、昭和17年(1942)に三俣村と三浜村が合併して睦浜村を新設し、昭和30年(1955)に大坂村と睦浜村が合併して大坂村を新設し、昭和31年(1956)に大坂村、千浜村を廃して新しく大浜町を定め、さらに昭和32年(1957)に旧中村海戸地区が城東村から編入合併し大浜町となった。昭和48年(1973)に大浜町と城東村が合併して「大東町」が誕生した。

旧大須賀町の区域では、明治22年(1889)の町村施行により、大須賀村、大渕村、笠原村が誕生し、大正3年(1914)に大須賀村を町制施行により横須賀町と改めた。昭和31年(1956)に横須賀町、大渕村、笠原村が合併して「大須賀町」が発足した。

掛川町	M28 西南郷村	S26	掛川市	H17 掛川市
大池村	T14			
南郷村		S18		
上内田村		S25		
西山口村		S26		
粟本村				
東山口村				
曾我村				
日坂村		S30		
東山村				
雨桜村	S7 桜木村	S29		
垂木村				
和田岡村				
原谷村		S32		
原田村				
原泉村	(一部)	S31		
西郷村		S29		
倉真村		三笠村	S35	
千浜村			大東町	S48 大東町
大坂村		S31		
三浜村	S17 睦浜村	S30		
三俣村				
中村	(海戸)	S32		
土方村		S31		
佐東村		S30		
岩滑村	S18			
大須賀村	T3 横須賀町		大須賀町	
大渕村		S31		
笠原村	(山崎の一部)			

図 合併経緯 (明治22年以降)

② 土地利用状況

山林が20.2%、農地（田、畑）が23.6%、宅地が9.9%を占めている。

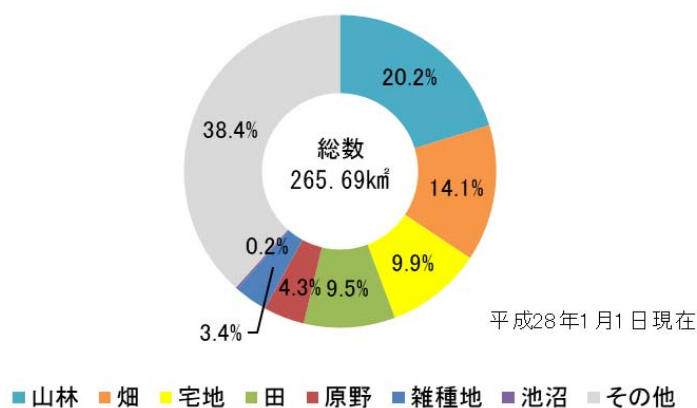


図 地目別面積（平成28年）

資料：平成28年度版 掛川市統計書

平成28年（2016）3月31日現在、面積26,569haのうち21,164ha（79.7%）が都市計画区域であり、そのうち2,440.3ha（11.5%）が用途地域に指定されている。用途地域の構成比をみると、住居系用途65.5%、商業系用途4.5%、工業系用途30.0%となっている。

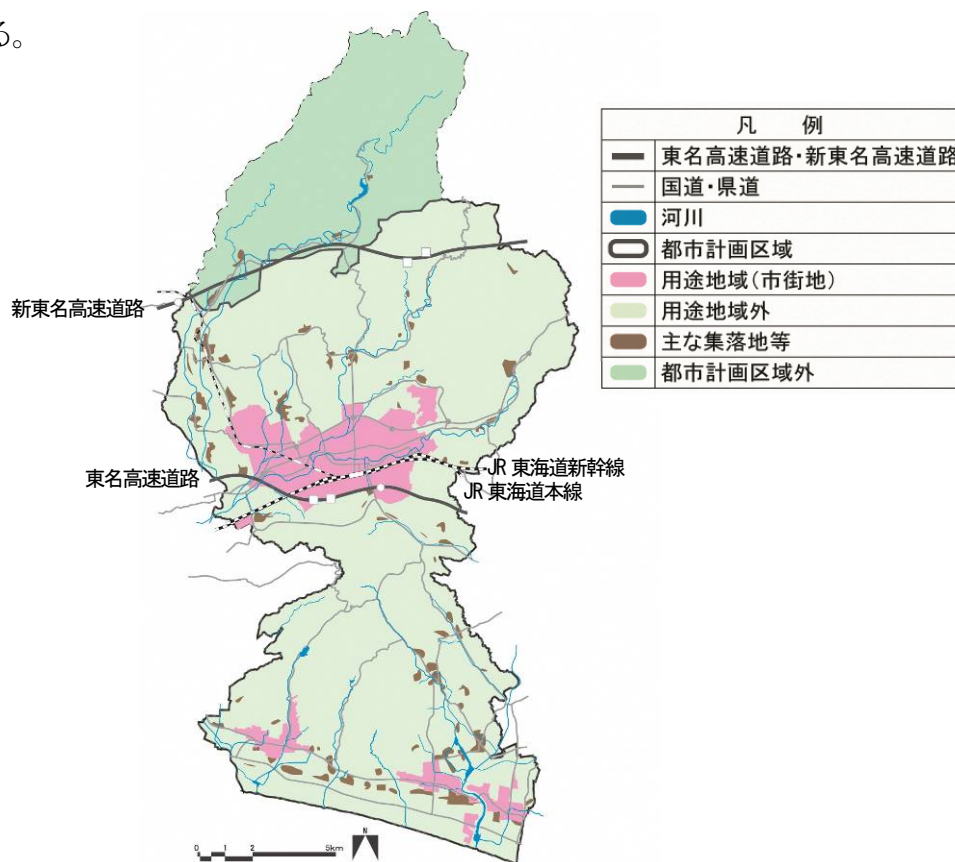


図 掛川市都市計画区域図

③ 掛川城周辺の市街地形成

掛川城は、山内一豊が城下町を整備し、江戸時代には太田氏等が城主を務め、明治初期まで続いた。東西に流れる逆川などの河川は、天然の堀として機能した。逆川の北側が城内（侍町）、逆川の南側が宿場町（町人町）であった。東海道沿いには旅籠のほか商人が集まり、裏手の通りには瓦屋、紺屋、研屋などの職人が集住していた。長い歴史の間には地震や戦火で宿場町の建て直しが幾度と有り、更には、昭和40年代前半から中心市街地の整備に着手し、平成2年（1990）には駅前土地区画整理が完工、平成11年（1999）には駅北土地区画整理が完工するなどの基盤整備が進み歴史的建造物が失われてきたが、城下町、宿場町としての面影が、地名や外堀跡などに見られる。

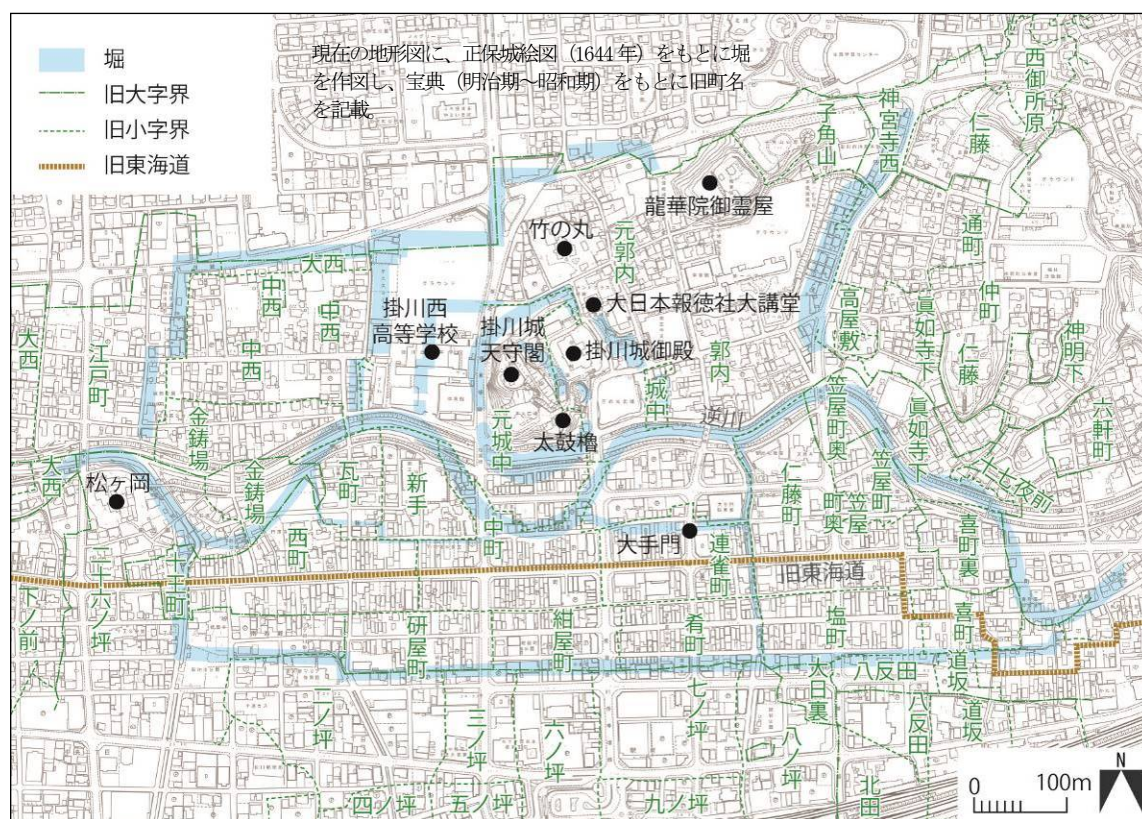


図 江戸時代の堀と近代の町名



外堀跡（研屋町）



土堀跡（掛川西高校西側）

(2) 人口動態

平成27年(2015)10月1日の国勢調査によれば、総人口は114,602人である。昭和60年(1985)以降増加を続けていたが、平成17年(2005)の117,857人をピークに、減少に転じている。国立社会保障・人口問題研究所によれば、今後も人口減少の傾向が継続し、平成47年(2035)には約10万人になると予測されている。

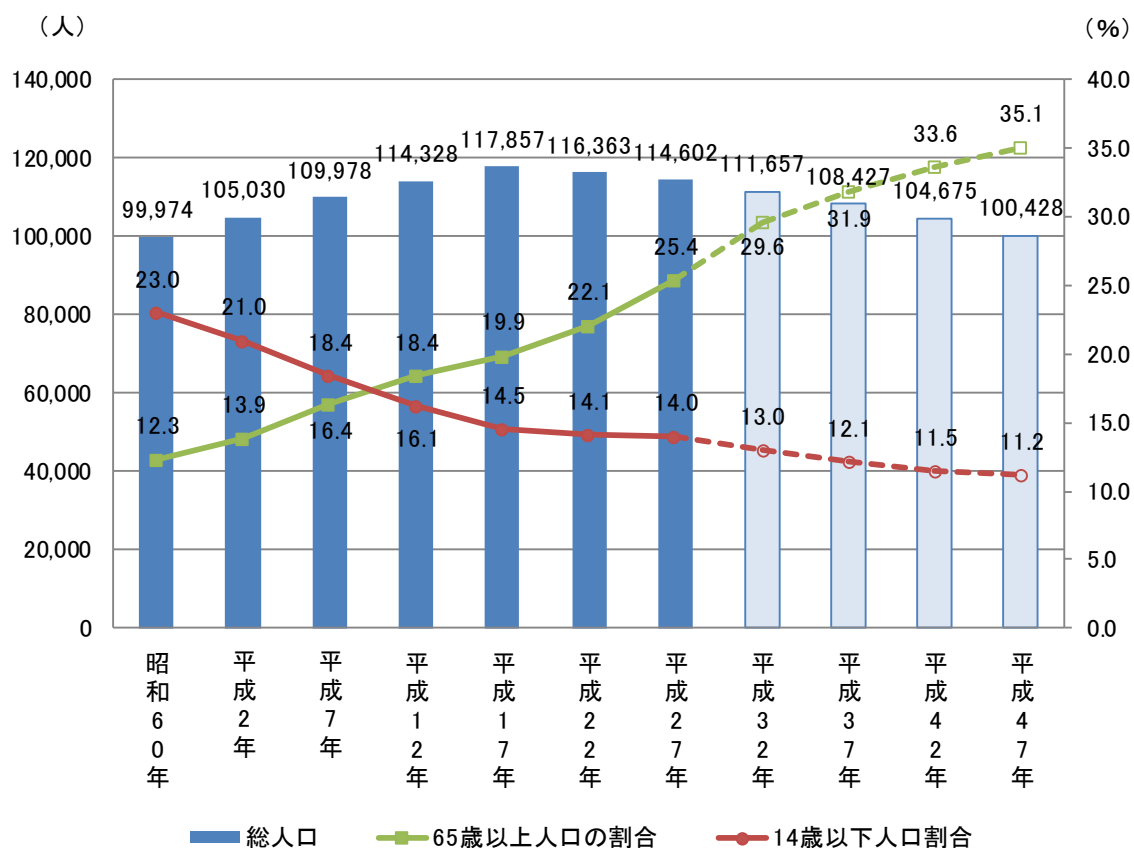


図 総人口の推移と老年人口・年少人口の割合

※平成12年までは、合併前の旧市町の人口の合計。総人口には年齢不詳を含む。平成32年以降は将来推計人口。
資料：＜平成22～27年＞国勢調査、＜平成32～47年＞国立社会保障・人口問題研究所

世帯数は41,050世帯である。世帯数は増加傾向が続いている一方、1世帯あたりの平均人員数は、核家族化などの進展を背景に減少傾向が続いている。

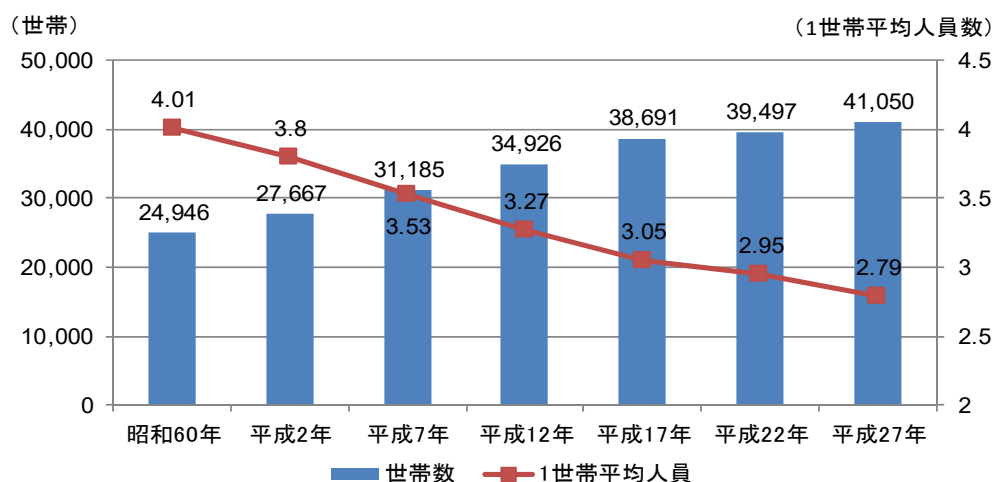


図 世帯数

※平成12年までは、合併前の旧市町の人口の合計。

資料：国勢調査

平成27年（2015）の年齢階級別人口は、生産年齢人口（15～64歳）割合は60.2%、高齢化率（65歳以上人口割合）は25.4%であり、生産年齢人口割合は減少傾向に、高齢化率は増加傾向にあり、少子高齢化が進行している。

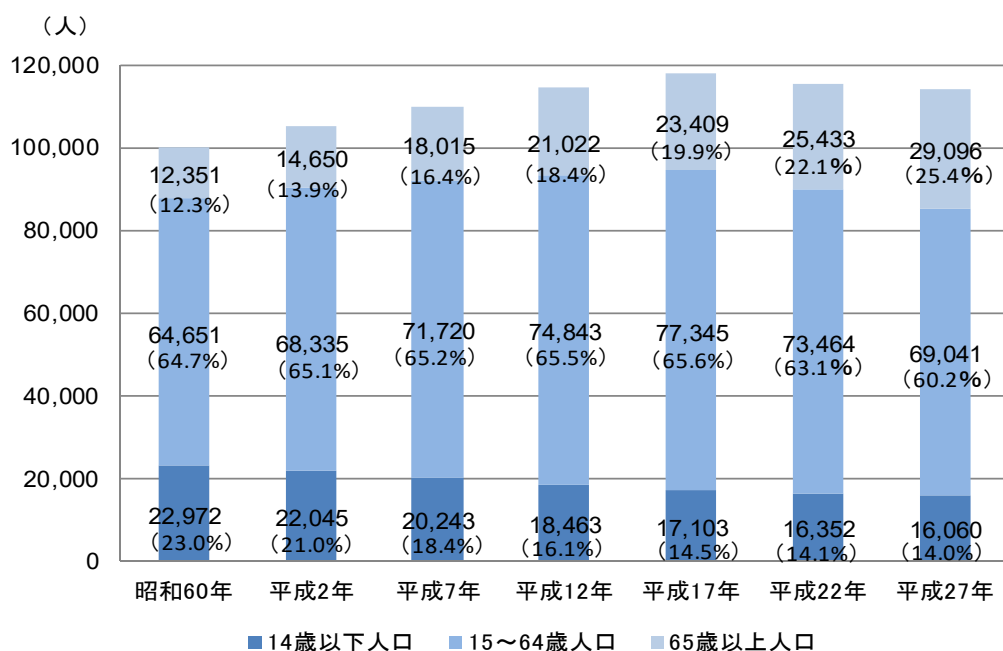


図 年齢階層別人口の推移

※括弧内は総人口（年齢不詳を含む）に占める割合。

資料：国勢調査

(3) 交通機関

本市は、東海道や秋葉街道（塩の道）といった東西・南北の街道の発達により、日坂宿や掛川宿などの宿場町や、掛川城や横須賀城を中心とする城下町が形成され、交通・文化の中心地として発展を遂げてきた。

東海道は、古代・中世を通じて東西交通の幹線道路で、江戸時代の五街道（東海道、中山道、甲州街道、奥州街道、日光街道）の最

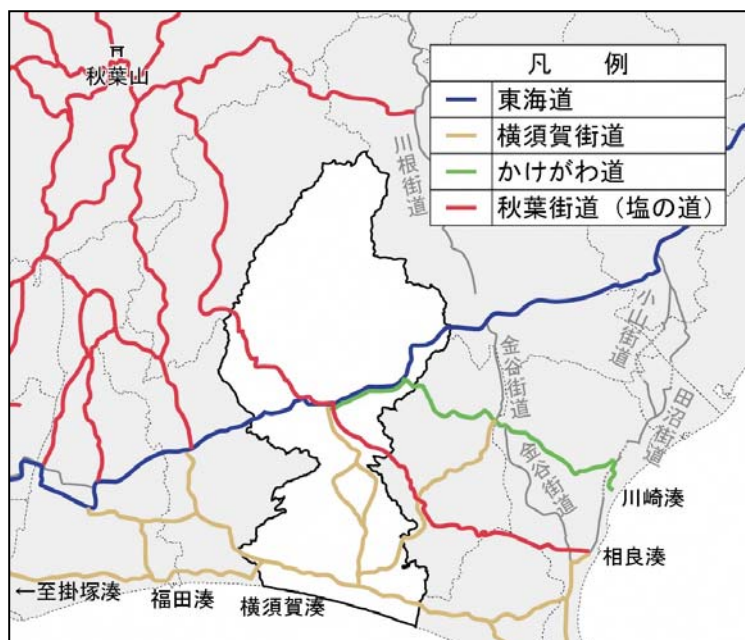


図 遠江国交通図

も重要な道であり、総延長約 500 kmのうち 16 kmが市内を通っていた。

遠州灘に面する横須賀の城下町からは、東海道の宿場に通じる道、駿河湾に面する相良に通じる道、天竜川河口の掛塚に通じる道などが開けていた。交易の道、参勤交代の道だったもので、それらは横須賀街道と呼ばれた。

そのほか、沿岸部の湊と東海道を結ぶ道として、かけがわ道（川崎湊～掛川）があり、幕府や掛川藩の経済を支える年貢米の輸送路であった。

代表的な南北の道としては、秋葉山に行く秋葉街道がある。秋葉山は、火防や武運長久の霊験あらたかとされ、大名から庶民まで広く信仰を集めた。掛川宿からの秋葉街道の起点だった大池橋のそばには鳥居と秋葉神社の遙拝所ようはいじよが建っている。この道が信州まで続いていることから信州街道ともいい、古来より塩を運んだ道であることから塩の道とも呼ばれている。



秋葉神社掛川遙拝所

現在、中央部には、J R東海道新幹線、J R東海道本線、東名高速道路、国道1号が通り、南部には国道150号が横断しており、市内交通や広域交通は比較的充実している。平成21年（2009）には市の東側約15kmに富士山静岡空港が開港し、平成24年（2012）には新東名高速道路が開通し、関東、関西の両経済圏にアクセスしやすい。

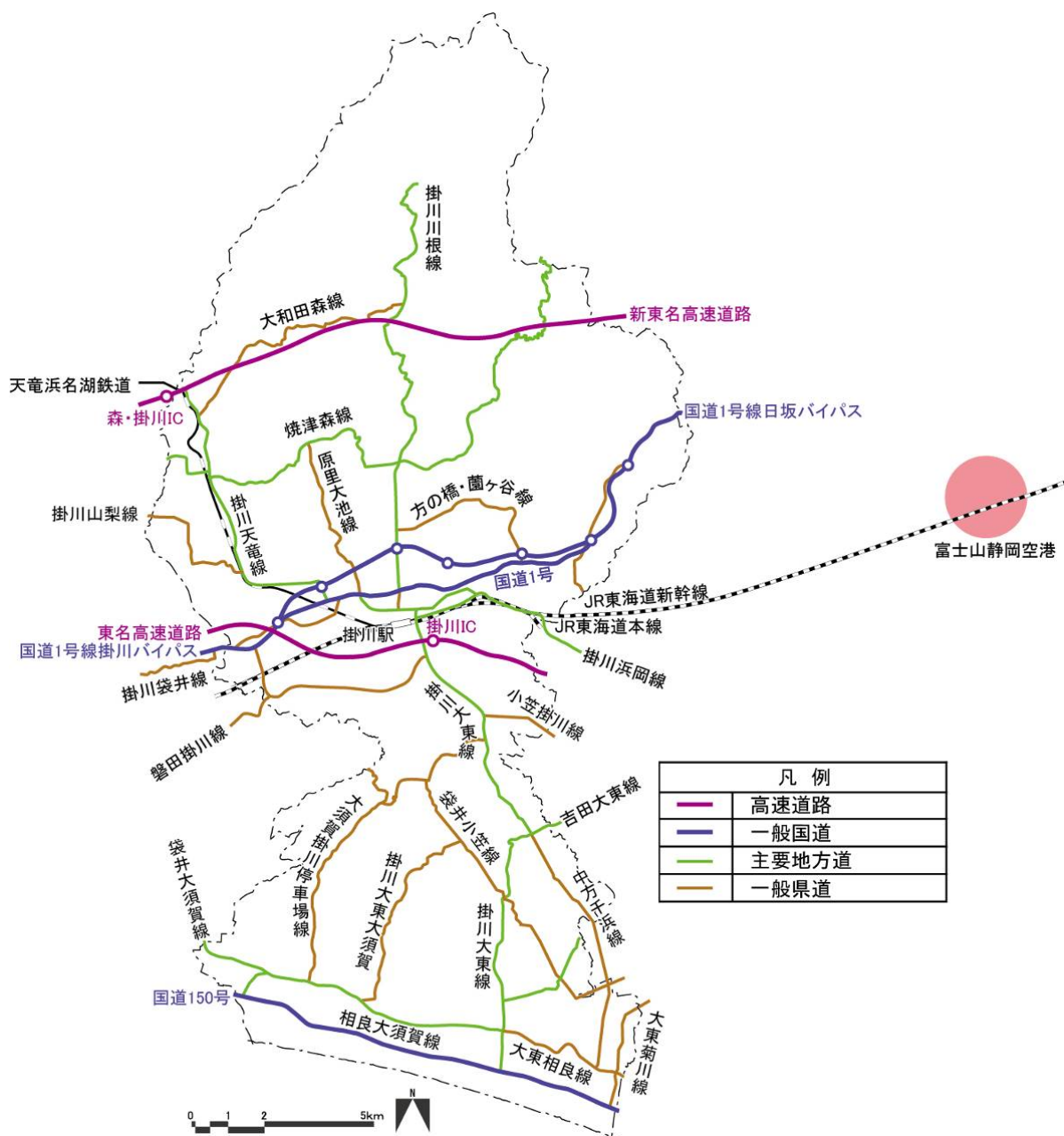


図 道路網・鉄道網図

鉄道はJ R東海道新幹線に1駅、J R東海道本線に1駅、天竜浜名湖鉄道に8駅を有している。J R東海掛川駅（在来線と新幹線の合計）及び天竜浜名湖鉄道各駅の年間乗車人数は、平成23年（2011）以降減少が続いたが、平成27年（2015）には増加に転じ約456万人となっている。

バスは路線バスが3路線あるほか、自主運行バスが8路線あり、民間乗合バスの廃止に伴う交通空白地域や市街地の交通手段として運行している。路線バス及び自主運行バスの年間乗車人数は、平成24年（2012）以降減少が続いたが、平成27年（2015）には増加に転じ約96万人となっている。

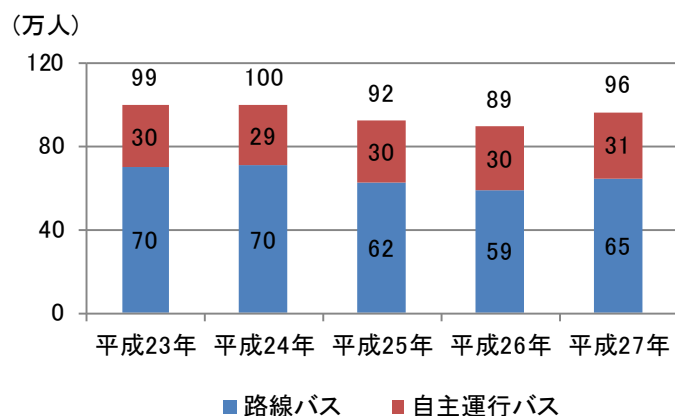


図 路線バス及び自主運行バスの年間乗車人数の推移

資料：平成28年度版 掛川市統計書

（4）産業

就業者数は平成17年（2005）をピークに減少傾向を示しており、平成22年（2010）に60,958人となっており、生産年齢人口（15～64歳）の83%に相当する。

産業別では、第1次産業及び第2次産業の就業人口の割合が減少傾向にある一方で、サービス業などを主体とした第3次産業就業人口の割合は増加傾向を示している。

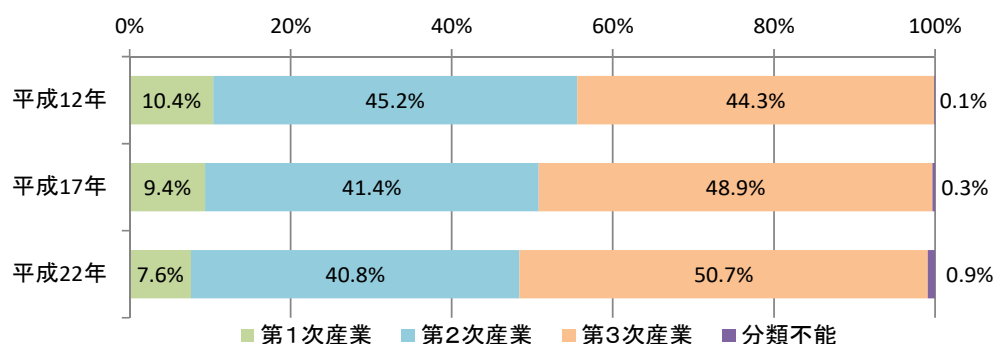


図 産業別就業人口

① 農業

温暖な気候を活かし、全国トップクラスの生産量を誇る緑茶やバラをはじめ、高品質のメロン、イチゴ、トマトなどが生産されている。さらに、伝統ある葛布（くずぬの・くずふ・かつぶ）や甘藷糖、遠州灘に面した砂地の土壌を活かした石川小芋や落花生も栽培されている。



斜面を活用した茶畑

緑茶の生育に適した気候に恵まれ、全国有数の茶産地である。日照時間が長く茶葉が肉厚になるため、仕上げに蒸し時間を長くとる「深蒸し」の製法がとられ特産となった。全国茶品評会では、産地賞1位を通算20回受賞している。平成25年（2013）、本市をはじめとする周辺市町で行われている、生物多様性を保全する伝統的な農法「静岡の茶草場農法」が世界農業遺産に認定された。

② 工業

昭和63年（1988）の東海道新幹線掛川駅、平成5年（1993）の東名高速道路掛川ICの誘致に合わせて東部の丘陵地に工業団地が造成された。また、交通アクセス条件と自然環境を活かし、大東上土方工業団地、新エコポリス工業団地が立地している。平成26年（2014）の製造品出荷額は、約1兆674億円（工業統計調査）であり、静岡県内では、浜松市、磐田市、静岡市、湖西市、富士市に次ぐ工業生産規模となっている。

③ 商業

掛川駅北口周辺に旧東海道に沿って商店街、飲食店街が集積し中心市街地を形成しているほか、大東区域、大須賀区域にそれぞれ商業集積地が見られる。平成26年（2014）の年間商品販売額は、1,847億円（商業統計調査）となっている。中心市街地は昭和40年代後半には賑わっていたが、市街地の拡大と郊外化に伴い居住人口の減少、大型店舗の撤退、空き店舗の増加などによる空洞化が進んでいる。



駅前市街地再開発事業による商業施設

現在、「掛川市中心市街地活性化基本計画」による事業を進めており、平成27年（2015）に駅前市街地再開発事業により商業施設がオープンした。また、平成28年（2016）8月末時点において市内に店舗面積3,000㎡以上の大型店が12店ある。

④ 観光

山、川、海と豊富な自然資源を有する本市には、キャンプ場やハイキングコースなど数多くの観光レクリエーション地がある。また、戦国時代から江戸時代にかけて発達した城下町文化や街道文化により、当時を偲^{しの}ばせるさまざまな歴史・文化的資源が現在も市内の至るところに残されている。

歴史街道を活用した文化展も開催されている。

近年の観光交流客数の動向は、概ね増加傾向にあるが、平成28年度（2016）は前年度より減少し、約358万人となっている。



遠州横須賀街道ちっちゃな文化展

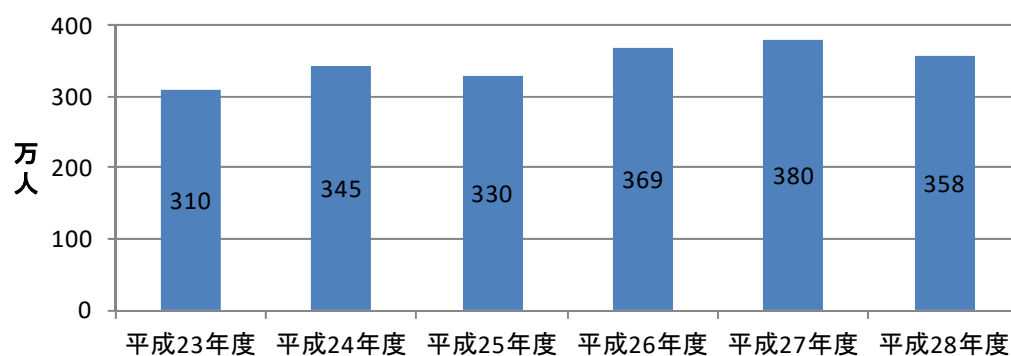


図 観光交流客数

資料：静岡県観光交流の動向、平成28年度は市調査

本市のシンボルとなっている掛川城（天守閣・御殿）への年間来場者数は、復元直後の平成6年度（1994）で50万人弱、大河ドラマ「功名が辻」放送時の平成18年度

（2006）は約30万人、平成28年度（2016）は約14万人となっている。掛川城周辺には城郭建造物や大日本報徳社などの歴史的建造物、二の丸茶室、二の丸美術館、竹の丸などの文化施設がある。

掛川市歴史的風致維持向上計画 第1章

表 主要な文化施設の利用者数

単位: 人

施設名	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
掛川城	112,742	109,860	117,374	129,662	140,975
二の丸茶室	14,096	15,082	14,869	16,978	18,123
掛川市二の丸美術館	26,876	23,126	15,857	23,510	21,629
竹の丸	3,905	17,004	13,523	20,514	15,774
大日本報徳社	2,030	2,830	4,572	17,047	23,628
横須賀城跡	7,600	7,200	7,200	7,200	7,200
清水邸庭園	7,542	7,914	8,006	7,498	10,640
大須賀歴史民俗資料館	404	655	657	740	964
高天神城跡	7,600	7,200	7,200	7,200	7,200
吉岡弥生記念館	2,026	1,946	1,831	1,944	1,867
川坂屋	2,768	2,725	3,192	3,604	7,265

表 主要なイベントの来場者数

単位: 人

イベント名	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
掛川祭(10月) ※H24、H27は大祭	77,000	20,000	20,000	37,500	20,000
三熊野神社大祭 (4月)	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000
高天神社例大祭(3月)	-	-	20,000	30,000	25,000
ちいねり (9月)	10,000	10,000	12,000	1,200	1,200
中八坂神社祇園祭 (10月)	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000
遠州横須賀街道ちっちゃな文化展(10月)	30,000	30,000	32,000	30,000	32,000

3. 歴史的環境

(1) 歴史

① 古代

【旧石器時代から縄文時代】

和田岡原^{わだおかはら}と堂山遺跡^{どうやま}から採集された石器は、市内で最も古く、約1万3千年前の縄文時代初期にあたるものである。萩ノ段遺跡^{はぎのだん}や向畑遺跡^{むかいばた}から発見された押型文土器^{おしがたもんどき}や無文土器^{むもんどき}は、約8千年前に中部地方以西に広く流行した土器で、市内では最も古い時期の土器である。現在、市内の縄文遺跡は50数カ所で知られているが、その多くは北部、中小河川の中流域から上流域の河岸段丘などの丘陵平坦地にある。

【弥生時代】

約2千5百年前の弥生時代になってから平野部でも比較的高い場所に集落を営み、稲作を開始したと考えられている。

弥生時代で最も古い遺跡は、原野谷川と逆川の合流点近くにある原川遺跡^{はらかわ}で、この遺跡からは建物跡と墓跡が発見されている。弥生時代後期から古墳時代前期になると、集落遺跡の多くは河岸段丘などの高台や丘陵先端の平坦な場所に営まれており、なかでも高田遺跡^{たかだ}や東ノ谷遺跡^{ひがしのや}、堂山遺跡^{どうやま}からは、炭化した米が発見されている。出土した土器や石器、木製品に稲作に関わる鋤^{すき}や鍬^{くわ}などの農具は、米を中心にした食生活用に形を変え、米倉などの米作につながる建物が新たに加わった。

政治や社会の動きを反映するかのように埋葬の形にも変化が認められるようになった。それまでの土葬^{どそうぼ}から木の棺を埋葬する方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}という墓域を設ける形になった。市内で最も古い墓跡は、約2千年前の山下遺跡^{やました}（各和^{かくわ}）で、この他に六ノ坪^{ろくのつぼ}（秋葉路^{はらしんでん}）や原新田^{はらしんでん}（上西郷）などの遺跡が発見されている。なお原新田遺跡で発見された方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}の墓穴からは、鉄製短剣^{てつせいたんけん}（鉄剣^{てっけん}）が出土しており、武器とともに埋葬される例としては現在県内で最も古い。

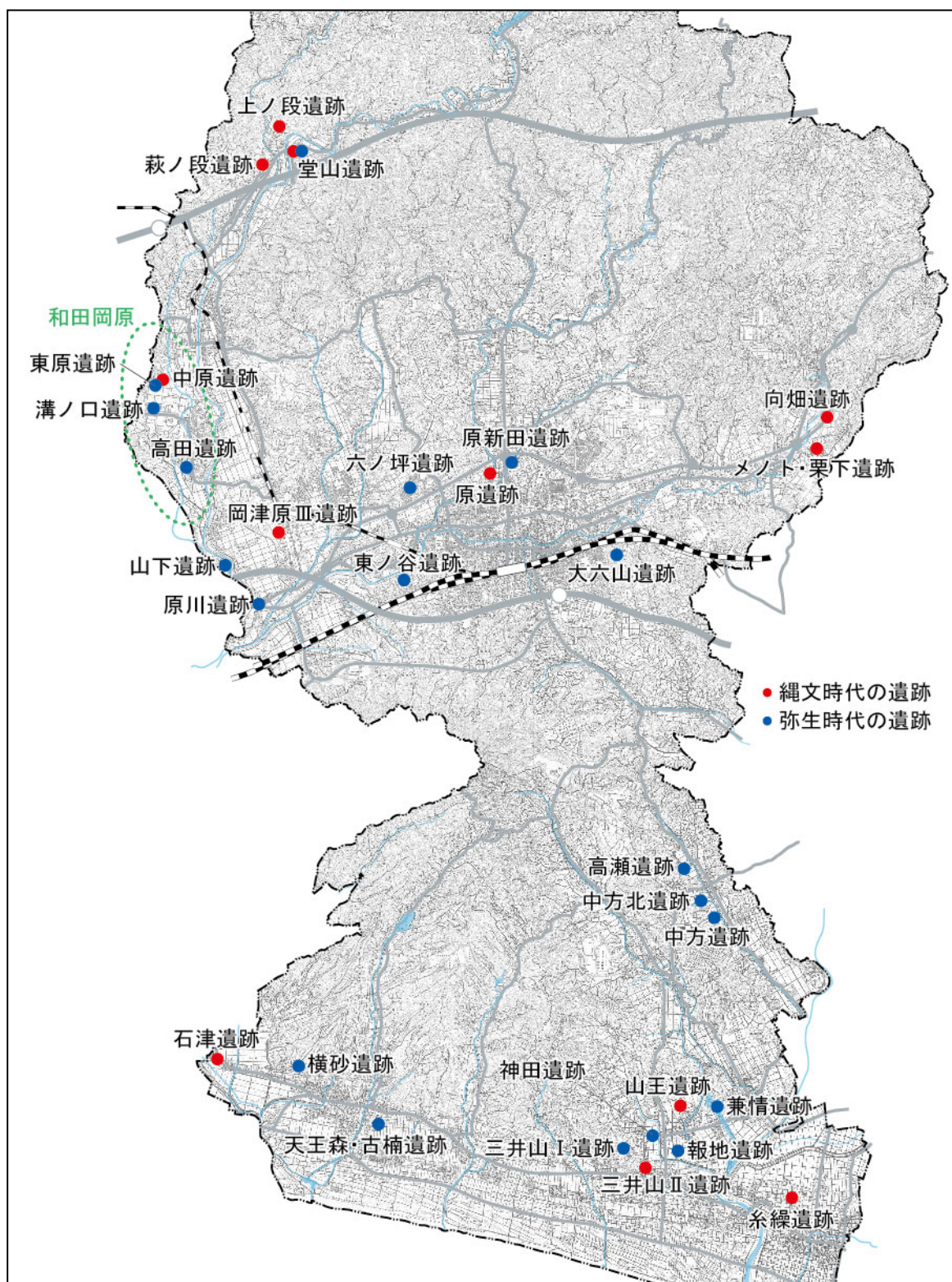


図 縄文・弥生時代の遺跡

② 古墳時代

【掛川における古墳】

近畿地方を中心とした大和王権^{やまとおうけん}は、3世紀末から4世紀にかけて盛んに地方へと進出し、支配領域を広げていった。大和王権によって統一された各地域の首長は、王権の勢力を背景としながら、一方では独自の支配力を示すことで大規模な前方後円墳を築造した。本市においては、5世紀代になり原野谷川中流域の和田岡地区の台地上^{かくわ}に各和金塚古墳^{かなづか}、瓢塚古墳^{ひさごづか}、行人塚古墳^{ぎょうにんづか}、吉岡大塚古墳^{よしおかおおづか}などの前方後円墳が築かれ、同じ時期に下流域の曽我地区の山地上に前方後円墳の前坪3号墳が築造されている。

6世紀中頃になると、山の谷斜面に穴を掘り墓地とする横穴墓^{おうけつぼ}が造られるようになった。本市を含む東遠江地方^{ひがしとおとうみ}は、県内有数の横穴墓が群集する地域として知られている。

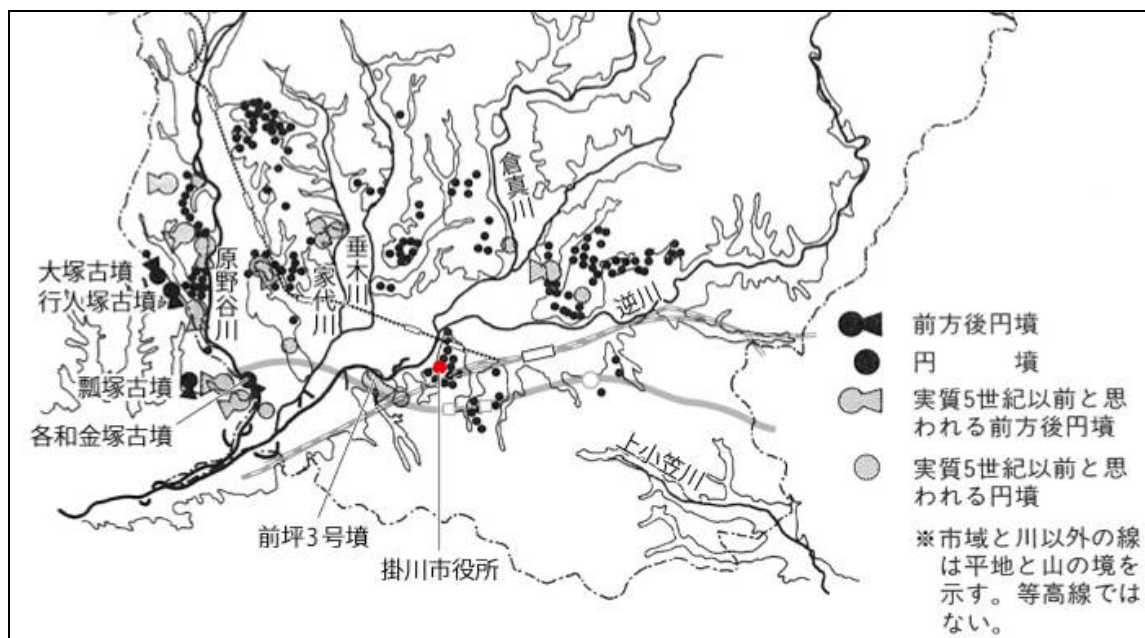


図 旧掛川市の区域の中期古墳分布図（資料：掛川市史上巻の資料を加工して作成）

③ 奈良・平安時代

【国郡制の成立と遠江国】

大宝元年（701）の大宝律令の制定によって、天皇を中心とする律令国家体制が成立した。地方制度としては、東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道の七道の下に国・郡・里という行政組織が置かれた。各国には郡を統括し、国内の行政、司法、軍事などを担当する国司が、中央から派遣された。遠江国^{とおとうみのくに}では、政治の中心として現在の磐田市に国府が置かれ、浜名^{はまな}、敷智^{ふち}、引佐^{いなさ}、龜玉^{あらたま}、長上^{ながかみ}、長下^{ながしも}、磐田^{いわた}、山香^{やまか}、周智^{すち}、山名^{やまな}、佐野^{さの}、城飼^{きこう}、秦原^{はいばら}の13郡を統括していた。

律令制下の交通制度をみると、主要幹線である七道に駅と駅馬を配置し、郡家（郡内の民政全般を行なう役所）には伝馬を配するという駅伝制を構築した。東海道のうち、遠江国には6駅があり、掛川には横尾駅があったと推定される。

六ノ坪遺跡（秋葉路）からは、奈良時代から平安時代までの門や建物跡が37棟整然と並んで発見された。当時貴重であった二彩にさいと呼ばれる緑色と黄色で色付けされた壺形土器、遠江国分寺と同じ瓦、「寺」と墨書きされた土器などが発見された。遺跡が、県西部から和田岡を経て古代東海道へと合流する交通上の要地に位置することから、関所の役を担う国、郡関係の役所跡または寺跡と考えられている。

【律令制下の社会と文化】

律令制のもとでは、土地と人民は天皇のものとなって、人民には口分田を与えられ、
 そようちょう
 租庸調の租税と兵役が課せられた。租として納められた稲は遠江国、郡の倉庫に蓄えられ、庸と調は都まで運送された。庸は10日間の労役の代わりに布を納めるもので、調は絹や糸などの繊維製品のほかに地方の特産物が納められた。政府に納める税は、それらの税を負担する家が都まで運ぶ決まりになっていた。物で納める税のほかに、都の警備にあたる衛士と九州の警備につく防人と呼ばれる兵役があり、人々への負担は重くのしかかった。「万葉集」には、防人として掛川から派遣された人が詠んだ歌も収められている。

また、奈良時代には仏教が全国に広まり、^{しやう}聖武天皇は奈良に東大寺を建てるとともに、国々に国分寺を建てることを命じた。遠江の国分寺は、国府のあつた磐田の台地に建てられ、建物に使用された瓦は、大須賀地区の^{せい が や こようぐん}清ヶ谷古窯群で作られた。

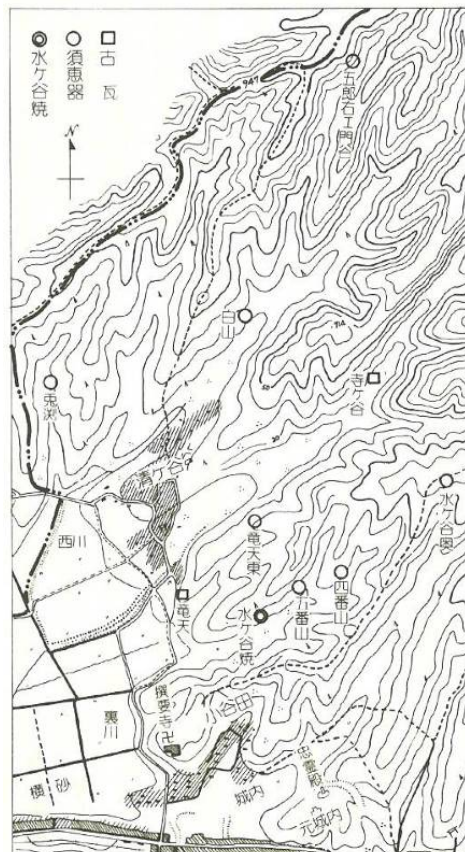


図 清ヶ谷古窯跡分布図 資料：大須賀町誌

【律令制の崩れと荘園の成立】

10世紀以降になると、摂関政治や院政などの変則的な政治が行われた。地方でも政治の混乱がみられ、地方の有力者や農民の中には力による行動をとる者もいた。平将門

の乱や藤原純友の乱は時代変化に伴う政情不安のなかで発生した出来事で、こうした時代背景の下、武士が生まれ、力をつけていった。

律令制が崩れてくると、上級貴族が一国を支配し、自分の同族から役人を派遣するようになった。天皇は寺社や貴族に土地を与え、自ら年貢を収取させる荘園を認めていった。

④ 鎌倉時代

【荘園の広がり】

このころの本市の区域には、天皇家、延暦寺などの大きな寺院を領主とする荘園、遠江国の領地である国衙領、伊勢神宮の領地である御厨があった。領主は荘園に管理する人を派遣し、幕府は地頭を置いて荘園の年貢徴収や治安維持を行っていた。

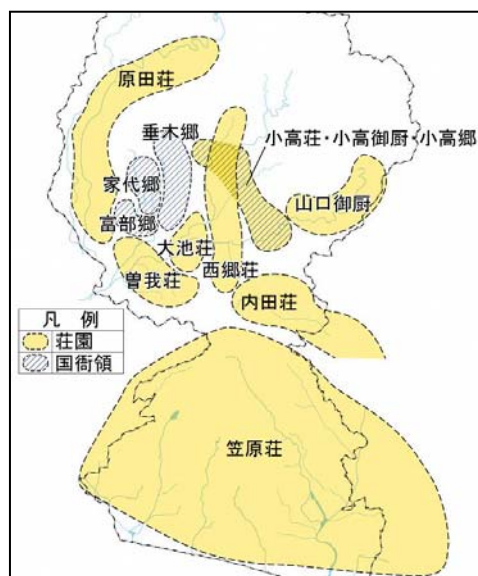


図 荘園・国衙領分布図

【掛川の代表的な武士】

遠江国には平安期から知られた武士団として、井伊氏、浅羽氏、横地氏、勝間田氏、内田氏がいた。鎌倉初期の木曾義仲（源義仲）追討の軍勢の中に内田家吉の名がある。家吉は、義仲軍を追撃していたとき、義仲の妻の巴御前に討たれた。内田氏の荘域は、上内田・中内田・下内田にかけての上小笠川流域の広い荘園で、塩の道の中継地に位置しており、東海道につながるこの地を抑えていたことは内田氏の勢力を物語るものであった。

また、原野谷川流域にあった原田荘の地頭に、原氏という武士がいた。原氏は荘園の一部を支配する地頭から勢力を伸ばし、15世紀後半には荘園全体を支配するようになった。

⑤ 室町時代

【遠江国の守護】

守護は、源頼朝によってそれぞれの国に設置され、軍事や警察の権力を与えられていた。室町幕府を開いた足利尊氏は、足利氏の一族で、尊氏に従って戦いで手柄を立てた今川氏を、遠江国の守護に任命した。遠江国の守護は、15世紀の初め頃までは何人も

交替したが、その後、足利氏の一族で、将軍を補佐する職にあった有力な大名の斯波氏^{しば}が任命された。しかし、斯波氏は15世紀の中ごろに相続をめぐる争いを起こし、この争いが斯波氏の勢力を衰えさせただけでなく、応仁の乱の原因の一つになった。

斯波氏の勢力が衰えると、市内の原氏や川井氏^{かわい}などが勢力を伸ばし、さらに駿河国の守護大名である今川氏が遠江国に領地を確保するために攻めてきた。

【掛川三城における攻防】

掛川城・高天神城・横須賀城は、戦国時代に今川・徳川・武田軍の武将たちの激しい攻防の舞台となった。

掛川城

文明年間（1469～1487）の初め、今川氏が遠江進出を狙い、重臣の朝比奈氏に命じて掛川古城を築かせた。掛川古城は、現在の掛川城跡から北東方向にあたる天王山の上に築かれた。今川氏の勢力拡大に伴い、永正10年（1513）、朝比奈氏が古城の南西500mほどの竜頭山^{りゅうとうざん}に新たに掛川城（現在の掛川城の位置）を築いた。

しかし、桶狭間の戦いで今川義元が織田信長に討ち取られたことにより、遠江における戦国大名の城取り合戦が始まった。永禄11年（1568）武田軍に追われた今川義元の子氏真は、家臣の朝比奈泰朝を頼り掛川城へ逃げ込んだ。永禄12年（1569）徳川家康は、氏真の立てこもる掛川城を攻めた。家康が攻撃を仕掛けた際、井戸から噴き出した霧が城を覆い隠し、徳川軍は攻撃できなくなったという言い伝えが残っている。半年に及ぶ攻防の後、城は家康に明け渡され、掛川周辺を治めるために重要な城であると考えた家康は、掛川城主に重臣の石川家成^{いへしげ}を置いた。



図 懸川古城推定縄張図
資料：掛川市史上巻
（『日本城郭大系』第9巻による）



掛川城 霧吹き井戸

高天神城^{たかてんじんじょう}

遠州の要塞、高天神城をめぐる戦いは武田軍と徳川軍の間で繰り広げられた。「高天神を制するものは遠州を制する」とも言わしめるほどの難攻不落の山城であった。

天正2年（1574）武田信玄の子勝頼が高天神を攻め、徳川軍の小笠原^{おがさわら}与八郎^{よはちろう}長忠は籠

城決戦するも力尽きて開城した。翌年、長篠の戦いに大敗した勝頼は、高天神を最後の砦とし、城の防御を強化していった。

一方、家康は高天神を奪還するためにその周囲に六つの攻撃用砦を築き、兵糧攻めによる包囲作戦を行った。食糧を運搬する道を断たれた武田軍は、天正9年（1581）決死の総攻撃を仕掛けたが、徳川軍に敗れ、全員討ち死にした。

横須賀城

横須賀城は、徳川軍の高天神城奪還に向けた戦線基地として、天正8年（1580）^{おお}大須賀康高が築いた。

高天神城が落城し廃城となった後、城の役割は横須賀城が引き継ぐこととなり、港を兼ねていた山城は、近世城郭へと姿を変え、物流・交流の拠点となった。

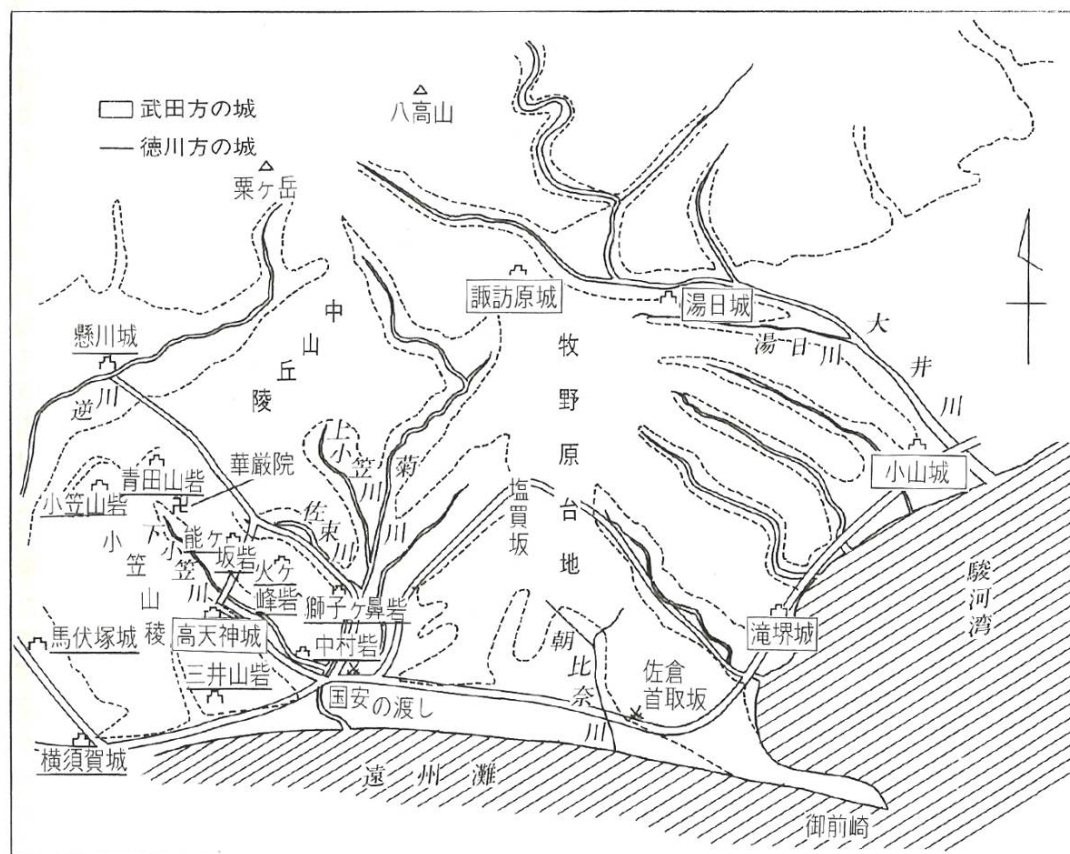


図 高天神城をめぐる戦いのころの武田方の城と徳川方の城
資料：掛川市史上巻

⑥ 安土桃山時代

【山内一豊の掛川城入城】

天正18年（1590）天下を統一した豊臣秀吉は、遠江を支配していた徳川家康を関東に移し、家康を包囲するために、家康の領国だった駿河、遠江、甲斐、信濃に自分の家臣を配置し、山内一豊を5万石で掛川城主にした。一豊は、在城10年間で掛川城域や城

下を整備し、領国内の検地を実施して租税制度を整えた。さらに大井川の治水工事をし、洪水を防ぐとともに新田を開発するなど、江戸時代の掛川や領国下の村々の基礎をつくった。

【掛川城と城下町の整備】

朝比奈氏によって築かれた掛川城は、中世城郭の域を出ない平山城で、戦火による傷みも激しかったことから、一豊は、関東の徳川家康が攻めてくることを想定して、大勢の兵が立てこもることができるよう城を大きくした。また、攻撃から建物や堀を守るため土塁を築き、堀を巡らして、惣構え^{そうがま}の城として形を整えた。

城郭の南東に大手門を設けて東海道の宿場町とつなげ、城の主郭を囲んで武家屋敷が並び、逆川の南、大手門の門前を東西に宿場の町屋が並び、宿場の東西はずれに木戸口とその外側の堀を設けて城域境とした。この惣構えの工事によって、宿場町を伴った城下町が整備され、後に掛川13町といわれる基となった町屋が生まれた。そして、一豊によって掛川城で初となる天守閣が建造された。

新しい城と城下町を造成するに伴い、城内の神社仏閣をすべて城郭外に移した。掛川天王社として城中にあった龍尾神社が現在地にあるのは、その一例である。

※惣構え…従来の城郭が城下町の武士以外の者を城内に囲い込まない形態であるのに対し、町民をも城内に囲い込む形態をいう。

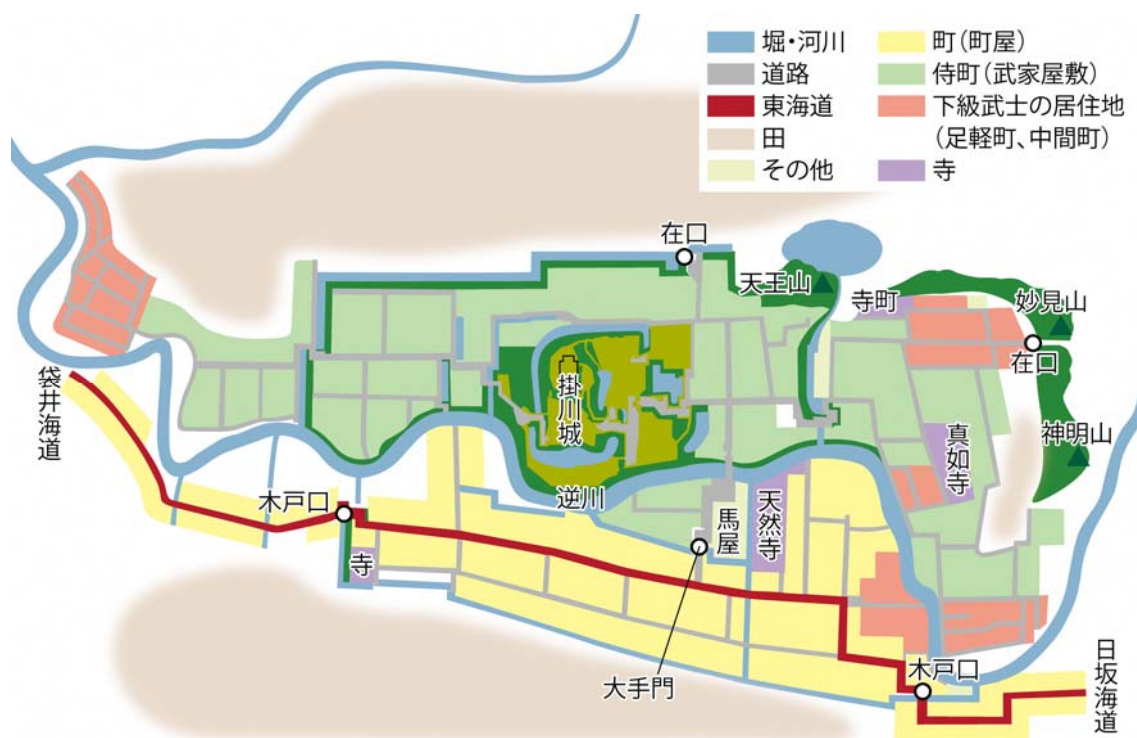


図 遠州掛川城絵略図

【掛川茶の始まり】

掛川藩が編さんした地誌『^{かけがわし こう}掛川誌稿』によると、天正年間(1572～1592)、高田の永^{えい}住^{じゅうじ}寺改築の時、檀徒数名が京都方面の寺院を視察した際、茶の種子を持ち帰り、和田岡の吉岡原に蒔いたのが掛川茶の始まりと記されている。掛川城主の山内一豊が、小夜^{さよ}の中山^{なかやま}峠^{とうげ}の久延寺^{きゅうえんじ}で徳川家康をお茶でもてなしたとする場面があるように、この頃には茶の栽培とともに茶文化も広がっていることがわかる。

⑦ 江戸時代

北部には旧掛川市の区域を中心にして掛川藩があり、南部には旧大須賀町を中心にして横須賀藩があったことから、それぞれの藩の様子に分けて解説する。

【掛川藩の成立と展開】

掛川藩主の変遷

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いの後、山内一豊が土佐高知に移った後に徳川家康の異父弟にあたる松平定勝が掛川城に入った。以来、掛川には、譜代大名のなかでも中小の有力大名が配置されていた。幕藩体制社会の前半にあつては、入封しても短期間で移封するという状況が続き、安定した藩政や支配がされるようになったのは慶安元年(1648)以降のことで、井伊氏が4代46年間、小笠原氏が3代35年間、そして太田氏が7代122年間続いて、明治時代を迎えた。

太田氏7代122年

太田道灌^{どうかん}の末裔^{まつえい}である太田資俊^{すけとし}は、上野国(群馬県)館林から、延享3年(1746)5万石で入封した。以来太田氏は資俊^{すけちか}、資愛^{すけのぶ}、資順^{すけとき}、資言^{すけもと}、資始^{すけかつ}、資功^{すけよし}、資美と7代122年の間、寺社奉行や老中などの幕府の重要な職を勤めつつ、自分の領地である掛川藩の政治にも力を注いだ。

資愛の治世の時には、遠州地方で初の藩校を掛川城内に設け(享和元年(1801)設立)、はじめ「北門書院」、後に「徳造書院」、「教養館」と称した。藩校教授に幕府^{しょう}の昌^{しょう}平^{へい}翼^{よく}から松崎慊堂^{まつざきこうどう}を招き、剣や槍などの武芸のほか、礼儀作法や社会の秩序、中国の歴史などの学問を学ばせた。また藩校では、藩士だけでなく希望する町方や村方の若者も学ぶことができた。

資順・資言・資始の治世、文化3年(1806)～文政年間(1818～1830)には、藩政改革の基礎資料にするため、藩内の宿や村の歴史、人口、産物、名所旧跡などをまとめた『掛川誌稿』という資料をつくらせた。また、度々発生する飢餓や天災に備えて、天保4年

(1833)掛川藩主が領内に『農論』という書を頒布し、凶年の貯えなど人々の平生の心構えをつくらせようとした。

このように太田氏の文教を重んじる家系の影響により、藩全体の文化水準は高まり、遠州地方の政治経済、文化などのさまざまな面で中心地として栄えてきた。

東海道の宿場町

江戸と京都を結ぶ「東海道」が整備され、掛川には「掛川宿」と「日坂宿」の2つの宿場があり、多くの人と物が往来した。参勤交代の制度などにより、大名などが休憩や宿泊をする本陣や脇本陣が整備され、商工業の発達に伴い商人などが行き交うようになり、旅籠屋が整備された。

掛川宿内には、木町（後に喜町）、仁藤町、塩町、連雀町、肴町、紺屋町、中町、研屋町、瓦町、西町の10カ町があり、その他に新町、十九首町、下俣町の3カ町があげられ、それら13カ町にそれぞれ庄屋が置かれていた。

幕末の藩財政と御用達

幕末期の掛川藩財政をみると、天災や不作による百姓・町人の生活困窮者の救済、幕末の政治情勢による軍事費の支出など、行政費の需要は高まる一方で、極端な赤字財政であった。赤字財政を克服するため、掛川藩では地方の豪農や町方の豪商を「御用達」として指名し、資金調達に働くことと交換条件に、名字帯刀を許していた。御用達を勤めた有力者の一人に、掛川城下西町に住む山崎万右衛門がいた。万右衛門は十王町に住居を移し（通称「松ヶ岡」）、掛川藩の御用達のみならず、田中藩、相良藩、横須賀藩、浜松藩の近隣諸大名や韮山代官所などの金子御用達も務めていた。



松ヶ岡（旧山崎家住宅）

報徳運動の広がり

幕末から明治に至る日本の近代化が始まろうとする時期、道徳と経済の調和が取れた社会づくりを目指す、二宮尊徳の報徳の教えに基づき、困窮にあえぐ農民の救済を目指した報徳運動が全国に広まった。

本市における報徳運動は、嘉永元年（1848）に倉真村の掛川藩地方御用達豪農岡田佐平治が生活に苦しむ農民を救い、疲弊した村を建て直すため、地元に報徳社をつく

ったのが始まりである。やがて佐平治は、長男の良一郎とともに、報徳の教えを仕法とともに周辺の村々に広めていった。

ため池農業の発展

掛川市の主要なため池は江戸時代に造られている。ため池築造にあたっては、百姓たちの労力や資金などの拠出だけでなく、掛川藩も可能な限り造成費の援助をしており、維持管理にも相応の支出をした。また、農村では豪農の地方御用達が指導者となり、疲弊した村の立て直しのため報徳の教えに基づき、報徳金を貸与して治水工事を促進していた。



宝谷池（初馬）

【横須賀藩の成立と展開】

横須賀藩主の変遷

初代城主の大須賀康高は領内の農業の発展に注力した。天正18年（1590）豊臣秀吉の小田原攻め後の家康の関東移封に伴い、2代目城主大須賀忠政も上総国久留里に移った。関東の徳川氏に対する豊臣勢力の最前衛地域となる駿河・遠江には、豊臣系の大が配置され、横須賀城には3代目城主として渡瀬繁詮、4代目城主として有馬豊氏が入った。

慶長6年（1601）、前年の関ヶ原の戦後の大名の再配置により、豊氏は丹波国福知山へ移封となり、横須賀城には2代目城主であった大須賀忠政が久留里から戻り、5代目城主となった。その後、石高2万5千石から5万5千石の譜代大名（松平（大須賀）2代、松平（能見）氏2代、井上氏2代、本多氏1代、西尾氏8代）の居城となり、築城から明治維新で廃城となるまで、約290年20代の城主を数えた。

本多氏

天保2年（1645）本多利長が5万石で12代目横須賀城主となり、38年間城主を務めた。城主になった時はまだ江戸におり、実際に横須賀に入ったのは承応2年（1653）であった。利長は領地高、家臣ともに多かったため、城下に侍町や足軽町を新たに立て、城下で治水等の普請をした。利長の頃に、現在に残される城下町の範囲になった。

西尾氏8代186年

天和2年（1682）西尾忠成が石高2万5千石で13代目横須賀城主となり、以後、横

須賀城最後の城主西尾^{ただあつ}忠篤まで、忠成^{ただなお}、忠尚^{ただみつ}、忠需^{ただゆき}、忠移^{ただよし}、忠善^{ただかた}、忠固^{たださか}、忠受、忠篤と8代、186年間続いた。

歴代の当主は、譜代大名として、徳川幕府の奏者番などの要職を務め、なかでも14代目城主忠尚は、寺社奉行、若年寄、老中を務めて、領地も加増を受けて3万5千石となり、この石高が幕末まで継承され、この間、藩主として領内の産業の発展にも力を注いだ。

農業では、新田開発などによる米の増産はもとより、サツマイモ、サトウキビなどの新作物の導入と栽培奨励、砂糖の製造、販売を進めた。漁業では、地引き網漁法の導入による鰯^{ほしか}の漁獲増と干鰯肥料の生産などを進めた。このような施策により、城下町横須賀は、南遠地域の中心地として大いに栄え商業も盛んになった。

教育文化面では、横須賀藩学問所^{しゅうどうかん}「修道館」を設立して、藩士の師弟教育に力を注ぎ、儒学や漢学、国学などの学問を奨励した。14代目城主忠尚は、城下でお抱え力士に相撲を取らせたり、花火を催したりして、住民の娯楽にも心を配っていたことが記録に残っている。17代目城主忠善は、蘭学者高森^{たかもり}観好^{かんこう}や絵師大久保^{おおく}一丘^{いっきゅう}を招き、蘭学や絵画を奨励した。また、幕末の横須賀藩では、海边防備充実のため、農兵隊を組織させ、調練を行なっている。

このように西尾氏歴代の当主が、この地域の産業・文化の振興に果たした業績は大変大きなものがある。

横須賀城下のまちづくり

城下のまちづくりは、2代目城主大須賀忠政の時から始められた。臣下の屋敷を谷口通り（坂下の谷）や石津（現横砂）につくって侍町とした。町人のためには、あらかじめ町割を定め、町屋^{ふしん}を普請する者には、奥行16間（約29m）間口は望み次第の地所と竹木を与え、その上年貢諸役を免除することにした。本町^{ほんまち}、新町^{しんまち}、軍全町^{ぐんぜんまち}など、今も残っている町の名前が多い。

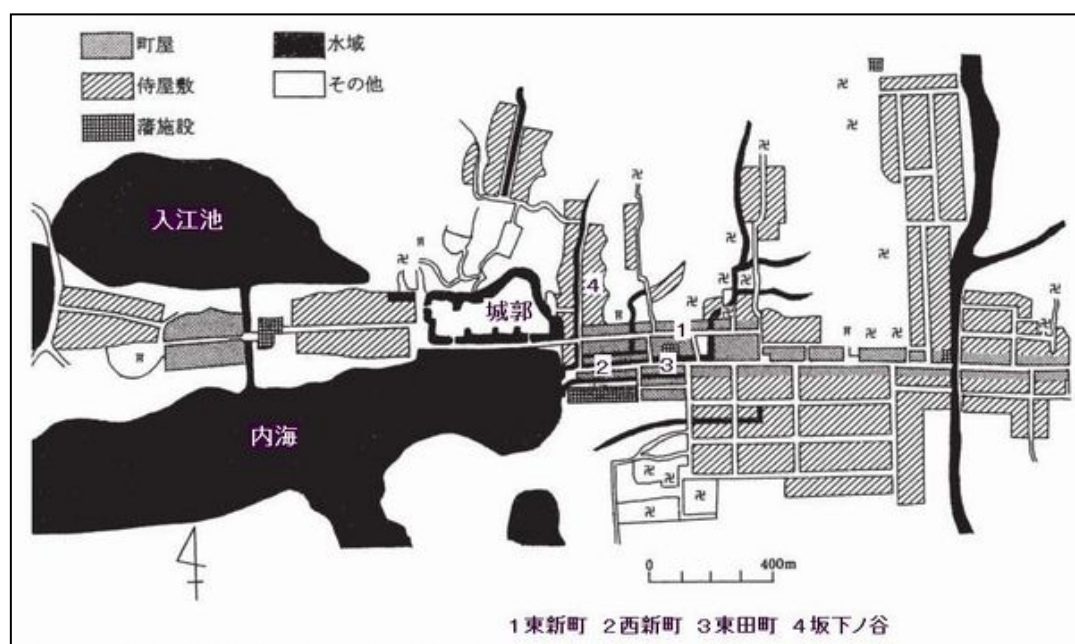
横須賀の町は交通上も一層重要な地となり、「横須賀街道」という言葉が残っているのはその証の一つである。江戸時代の横須賀を中心とした道路のうち、菩提^{ぼだい}（法多^{はった}）の奥から下俣^{しもまた}へ越える山中に「腹すり」と言われる急な坂道がある。この腹すりは、掛川城主が一時定まらなかった間、12代目横須賀城主本多利長が掛川城を預かった際、両藩の交通の便を計って開いたといわれる。腹すりを経て掛川に通じる道は、横須賀近海で捕れた魚介類が掛川に運ばれるなど、明治・大正のころまでよく利用された。

海上交易の中継地

江戸時代の初期まで、横須賀城周辺まで入江になっており、「横須賀湊」と呼ばれる港があった。横須賀城を築城するときの石材や木材はここから船で陸上げされ、横須賀藩から江戸に送り出す年貢米などもここから海に積み出された。宝永4年(1707)の大地震により横須賀湊が湊の機能を失うと、それに代わって太田川口のふくで福田湊が利用された。横須賀から福田に至る水路が整備され、それ以後、米などが福田湊から江戸へ送られた。西本町の清水家や西田町の柴田家は、船による荷物を取り扱う回船問屋として繁栄した。



清水邸船着き場



横須賀城下の構造〔正保～天和〕（「遠州横須賀惣絵図」を模式図化、「遠州横須賀城下町の変遷過程と地域構造」から引用）

⑧ 明治・大正時代

【明治維新】

明治元年(1868)、鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍を破った新政府軍は、旧幕府軍が敗れ、徳川慶喜が江戸に入ると、これを追うように東海道を東に進んだ。これに合わせ、遠州地方では、討幕軍に加わり新しい世の中をつくろうと、石川依平らの国学の影響を受けた神主や国学者らを中心に「遠州報国隊」が結成され、掛川からも9人が参加し、江戸に向かった。また、掛川藩の武士も国学者らの強い働きかけを受け、幕府を倒す軍隊に協力し、明治政府を支持する立場をとった。

明治元年(1868)、掛川藩主は家臣ともども柴山藩^{しばやまはん}(千葉県)へ、横須賀藩主をはじめ藩士たちは安房^{あわ}(千葉県)へ移封となった。これに代わって徳川家達^{いえさと}を藩主とする徳川宗家が駿府(静岡)に入り、掛川藩及び横須賀藩の区域は静岡藩政下となった。明治4年(1871)の廃藩置県により、藩は廃止され、静岡県の管轄下に置かれた。

【学校教育の始まり】

明治5年(1872)に発布された「学制」と「学事奨励に関する被仰出書」^{おおせいだされしよ}により、明治6年(1873)に、掛川、岡津^{おかづ}、上垂木^{かみたるき}、倉真、日坂、下土方、西大坂、横須賀の8つの小学校が開校された。初めは寺院などを借りていたが、やがてそれぞれの村が個性豊かな近代的な学校をと考え、校舎を建てるようになった。そのため建築費用は高くなり、村人の寄付金や積立金による建築も行われた。

【産業の発達】

明治時代初め、本市の産業は農業が第一であった。土地は肥沃で、米がよく取れる地域であったが、明治20年頃からは茶の生産が盛んになり、次第に茶畑も増えていった。

また、江戸時代から掛川の特産品であった葛布は、明治に入ると武士の袴^{かみしも}などの需要が減り、生産量も落ちたが、明治30年頃から壁紙“カケガワ・グラス・クロス”として海外にも輸出されるようになった。

【道路、鉄道の整備】

明治時代になり交通路の整備は、道路よりも鉄道が優先された。このような状況下、産業の近代化には道路整備がつきもので、公費が投じられないことから有志達が私財を積み、多額の借金をして道路を整備した。

日本で初の民営有料道路となった「中山新道」^{なかやましんどう}の建設はその一例で、地元の有力者杉本権蔵^{すぎもとごんぞう}が東山の茶園造成を進めるために必要な道として、小夜の中山峠を越えない新しい道として、島田市金谷^{かなや}と日坂をつないだ。新道は明治12年(1879)に着工して翌年に開通し、借金返済のために通行料を取った。この他、収穫した茶をいち早く市場へ出荷するため、道の整備と隧道(トンネル)造成を行なった山崎千三郎^{やまざきせんざぶろう}や青野卯吉^{あおの うきち}らの取り組みもその例であった。

明治22年(1889)7月1日の東海道鉄道(東海道本線)の新橋・神戸間の開通に先立ち、4月16日、浜松・静岡間が開通し、掛川駅が誕生した。大正時代には、袋井から市内南部の大須賀・大東を通して藤枝までを結ぶ軽便鉄道「静岡鉄道駿遠線」^{すんえんせん}が走るようになり、自動車が多くなるまでは、人々の重要な移動手段として利用された。

⑨ 昭和・平成時代

【戦後の地域経済の振興】

戦後の農地改革により、掛川でも自作農が増え、農産物の増産や農業技術の発展に繋がった。また、アメリカ軍の援助により、昭和25年(1950)から国道1号の工事が行われた。また、敗戦によって衰えていた日本の産業は、昭和25年(1950)に起こった朝鮮戦争を境に発展し始めた。市内でも、楽器、オートバイ関連の工場などが造られ、機械化が進んだ。

【高度経済成長】

高度経済成長に伴い、市民の所得も向上して豊かな市民生活が急速に進んだ。自動車の交通量は増加し、市街地の道路も混雑することとなり、計画的な道路整備の取り組みが求められるようになった。昭和44年(1969)に東名高速道路が開通して、国道1号線の混雑が緩和され、工場進出が促進された。

昭和31年(1956)には新農村建設計画が立てられ、農業の近代化を目指した。明治20年(1887)掛川町の山崎千三郎により計画、測量された大井川疎水計画が、60年を経た昭和21年(1946)になって改めて大井川から水を引くことが計画された。総合開発計画に位置づけられ、昭和47年(1972)に大井川右岸用水として完成し、たび重なる干ばつに悩まされてきた地域の水利条件は大幅に改善された。

【町村合併】

明治22年(1889)市制町村制が施行された当時、掛川市は1町28か村に分かれていた。昭和29年(1954)から昭和35年(1960)にかけての合併によって、旧掛川市と大須賀町が誕生し、昭和48年(1973)には大浜町と城東村が合併して大東町が誕生して1市2町が成り立った。

【掛川市生涯学習都市宣言】

「日本一のまちづくり」を目指し昭和54年(1979)、全国初の「生涯学習都市宣言」を行なった。一生涯を通じ学習機会を持つことにとどまらず、学習したことを、自らが住むまちのまちづくりに活かしていくという、「個人の生涯学習」と「まちづくり」が相互に連動し合う、「生涯学習まちづくり」として進められてきた。地域の自然と歴史を大切にし、報徳の教えから学ぶことを軸にして、互いに役立ち合いながら、個人の生活と周囲(家族、地域、まち)を豊かにしていくことを目標としている。

【新幹線掛川駅開業とまちづくりの展開】

昭和52年(1977)に新幹線誘致運動がスタートし、10年以上に及ぶ誘致運動の結果、建設費用や資金を地元で負担する「請願駅」として、30億円もの市民募金が集まり、昭和63年(1988)新幹線掛川駅が開業した。

新幹線掛川駅の開業が契機となり、その後の大事業も市民力により次々と実現した。平成5年(1993)、民間企業を中心にして約12億円の出資金を得て東名掛川インターチェンジが開通した。掛川城大手門風の料金ゲートや大規模な樹林帯での緑化など、掛川の地域性と文化性を加えた景観とした。

また、嘉永7年(安政元年(1854))の大地震により損壊して失った掛川城天守閣は、多くの市民の熱意と努力、協力が実を結び、平成6年(1994)、日本で最初の本格木造復元天守閣として140年ぶりに再建された。同年、掛川城大手門も再建され、周囲の家々も城下町風に建てようとするまちづくり事業が進められている。

【平成の大合併以降】

平成17年(2005)4月、旧掛川市、大東町、大須賀町が合併し、現在の掛川市が誕生した。人口(平成27年国勢調査人口)は、114,602人であり、県内で3.1%を占め、県内23市中第9番目の人口規模を持つ都市である。

合併後10年を経過する間、リーマンショックによる経済の落ち込み、東日本大震災、グローバル化の加速、人口減少、少子化及び長寿化の進展など、社会経済情勢は急速に変化している。こうした社会状況を踏まえ、多様化する市民ニーズに柔軟に対応するとともに、独自のまちづくり戦略を打ち出し、将来に向けて市民が豊かさと幸せを実感できるよう、平成28年度(2016)から「第2次掛川市総合計画」の下で各種事業を展開している。今後10年間に重点的に取り組むべきことについて、(1)掛川への新しいひとの動きをつくる、(2)掛川にしごとをつくり安心して働けるようにする、(3)若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる、(4)明日の掛川をつくり豊かで潤いのある安心な暮らしを守る、という4つの戦略の柱をたてて施策を推進している。

(2) 関わりのある人物

○大須賀 康高（おおすか やすたか）

大永7年(1527)～天正17年(1589)

三河に生まれ、初め三河の酒井忠直に仕えていたが、稀にみる剛勇な人物で、徳川家康に見出されてその家来になった。天正2年(1574)には馬伏塚城主となり、次いで初代横須賀城主となった。姉川、三方ヶ原、長篠などの合戦に参加して功労があり、特に高天神合戦には大きな働きをした。高天神合戦後は、堤を築かせて田畑を開発するなど、領内の農業の発展に力を注いだ。



大須賀康高

○山内 一豊（やまうち かつとよ・やまのうち かずとよ）

天文14年(1545)～慶長10年(1605)

天文14年(1545)、尾張の黒田城に生まれる。織田信長に仕えるようになってから働き場所を得て、天正元年(1573)、豊臣秀吉の配下として浅井・浅倉攻めに参加し、戦功の褒美として、近江唐国^{からくに}400石を与えられた。以後、秀吉の出世と歩調を合わせるように石高が加増され、天正13年(1585)には近江の長浜城主で2万石に拔擢された。そして、小田原征伐のときの功績により掛川5万石を拝領し、慶長5年(1600)までの約11年間にわたり城主として掛川に在住する。着任早々、対徳川家康政策ということもあって、掛川城の大規模な改築に着手する。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで東軍（家康軍）として参加し、その功績により家康から土佐一国を拝領した。



山内一豊

○本多 利長（ほんだ としなが）

寛永12年(1635)～元禄5年(1692)

12代目横須賀城主。母は10代目城主である井上正就^{まさなり}の娘である。天保2年(1645)に城主となり、城内で多くの普請をしたほか、領内の土木工事也大いに進めた。領民を洪水から守るため、延長約14kmに及ぶ大堤防を築いている。

延宝7年(1679)の三熊野神社の社殿修理に当たり、補助の金子や遷宮費などを出し、数々の品を奉納するなどし、神儀を盛大にさせた。城主期間は38年間に及び多くの業

績を残したが、不行跡や悪政を咎められ、天和2年（1682）に改易、後に赦され出羽村山藩に移封された。

○横須賀城主の西尾氏（にしおし）

天和2年（1682）、西尾忠成が13代目横須賀城主となってから、8代にわたって西尾氏が城主となった。西尾氏が城主を務めた186年間の横須賀藩は、繁栄を続け、人々は安定した生活を送ることができた。

【西尾 忠成（にしお ただなり）】

承応2年（1689）～正徳3年（1713）

13代目横須賀城主。西新町に木戸番所を設けるなどして、城下町を整備した。横須賀が近世城下町のようになったのは、忠成の時代だとされている。

【西尾 忠尚（にしお ただなお）】

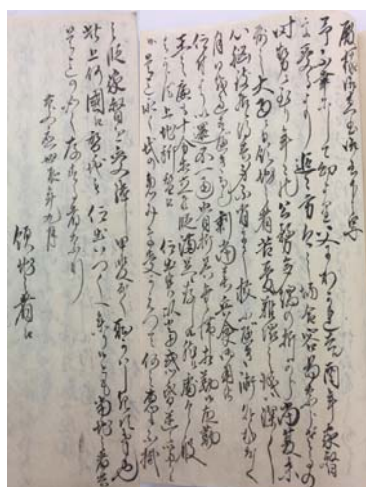
元禄2年（1689）～宝暦10年（1760）

14代目横須賀城主。西尾氏を発展させた人として有名である。幕府の寺社奉行や奏者番などを務め、その活躍が認められて、若年寄や老中などの要職に任ぜられた。また、参勤交代で江戸に行ったときに、家来に江戸祭礼囃子を習わせ、横須賀の地に伝えた。これが今でも三熊野神社の春の大祭で使われる山車の囃子となっている。

【西尾 忠篤（にしお ただあつ）】

嘉永3年（1850）～明治43年（1910）

20代目横須賀城主。築城から290年を経た明治元年（1868）、新政府により、遠江・駿河に徳川将軍家の後継、徳川家達を藩主とする静岡藩ができ、横須賀藩は廃藩となった。城主忠篤も安房花房（千葉県鴨川市）に移って、横須賀城は廃城、最後の城主になった。忠篤は横須賀を去るに当たり、横須賀藩領民に別れの言葉を文にして送った。



忠篤が領民に送った別れの言葉

【資料：慶応4年横須賀藩御用留第74番】

殿様御直書嘶書下の写（現代語訳：掛川市教育委員会）

私は、不幸にして幼い頃に父親と別れ、藩主となってからは、世上は混乱し、公務も多忙を極めるなか、今夏の未曾有の大雨被害による領民の苦渋には、私も深く心を痛めたが、私の力不足で十分な対処ができなかった。

一方、この春から新政府の兵食御用を勤めるなど、勤王に勤めてきたつもりであったが、この度、新政府から移封の命令があった、突然のことで大変当惑している。

永い間、領民の恵みを受けながらも、領民に対して何の恵みを与えることができず、藩主となった甲斐もなく、恥じ入るしだいである。

今後、私はどこへ所替えとなるか分からないが、領地の民はこれまでのように変わらず暮らしてほしい。

慶応4年9月 領地の者へ

○掛川城主の太田氏（おおたし）

延享3年（1746）上野国館林（現在の群馬県館林市）から掛川藩に来た太田氏は、明治元年（1868）まで7代120年あまりにわたって掛川藩主を務めた。寺社奉行や老中などの幕府の重要な職を勤めつつ、自分の領地である藩の政治にも力を注いだ。藩の若者を優れた人材に育てるために学校をつくり、藩内の様子を理解し、藩の立て直しのために宿や村の歴史や産物などをまとめた『掛川誌稿』という地誌をつくらせた。また、作物の不作による飢饉に備えさせるために平常の心得を書いた『農論』という本を藩内に配り、不作で貧しくなった農村を立て直すために報徳を取り入れて開墾やため池の改修を進めた。

【太田 資愛（おおた すけちか）】

元文4年（1739）～文化2年（1805）

22代目掛川城主太田資愛は、元文4年（1739）に生まれ、宝暦13年（1763）家督を継ぎ、明和5年（1768）奏者番、安永4年（1775）寺社奉行、天明元年（1781）若年寄、寛政元年（1789）京都所司代、寛政5年（1793）老中に就任し、享和元年（1801）老中を辞し、文化2年（1805）に死去した。藩内に学問所藩校（北門書院、後の徳造書院、教養館）を創設。
しょうへいこう 昌平こうどう 黌の松崎慊堂を教授に招く。掛川藩の地誌『掛川誌稿』編纂を指示し、文化発展に尽くす。

【太田 資始（おおた すけもと）】

寛政11年（1799）～慶応3年（1867）

25代目掛川城主太田資始は風水害や冷害などに対応するため、幕府に災害復旧工事への補助や囲いもみ（幕府、藩などが飢饉に備えて蓄える米）の使用許可を願い出た。また、天保の大飢饉の時には、被害を防ぐため、領民に松皮の食べ方などを教えた。

資始は、掛川藩内に御用達制を設けるなど藩政に努めるとともに、幕府の重職に就いて幕府政治にも参加した。

寺社奉行、大阪城代、京都所司代となり、天保7年（1836）には老中になった。天保12年（1841）に天保の改革を前にして、病気を理由に老中を辞めた。それから17年後、なおすけ 大老井伊直弼の任命で再び老中になった。イギリス、ロシア、フランスなどの各国使節と話し合っ、外貨との交換比率の問題、神奈川開港問題などの解決にあたった。しかし、安政の大獄を行なった直弼に反対する人々を支持したため、安政6年（1859）に老中を辞めさせられた。直弼の死後の文久3年（1863）、再び老中に任命され、老中上座として、会計や外国との関係処理する役を受け持った。

また、徳川三代将軍家光の霊を祀るため、文政5年（1822年）、掛川城の東に、りゅうげ 龍華院大猶院いんたいゆういん 霊屋を再建した。

【太田 資美（おおた すけよし）】

安政元年（1854）～大正2年（1913）

掛川藩最後の藩主。明治元（1868）1月、鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍が敗れ、11月太田資美は、重臣、家臣ともども、柴山村（千葉県芝山町）へ移った。掛川藩は、寺を借りて仮陣屋とし、芝山藩5万3千石の領地支配にあたった。明治2年（1869）6月までに掛川城の引き渡しを終えたとされている。



太田資美

○八木 美穂（やぎ よしほ）

寛政12年（1800）～安政元年（1854）

寛政12年（1800）、現在の掛川市浜野に生まれ、18歳のときには国学を志したといわれる。文政2年（1819）、白須賀宿（湖西市）の高名な国学者である夏目甕麿^{なつめ みかもろ}に入門する。甕麿の亡き後、独学で国学を学んだ。石川依平など、多くの国学者たちと親交を深め、美穂の交友範囲は伊勢の方まで及んでいた。天保8年（1837）から、自宅で門弟や近隣の者に学問を教えるようになった。弘化2年（1845）、横須賀藩藩主西尾忠受^{ただしか}の歌道の師となり学問を教える。それに伴い、横須賀藩藩校「修道館」の教授となり、さらに嘉永3年（1850）、藩校教授長となり、城下に家をもらった。また、藩主から地方史編さんを命じられ、『郷里雑記^{ごうりざっき}』を作成した。

教え子は多く、岩滑の中島嵩石^{すうせき}は、その弟子の鈴木春芳^{はるよし}とともに、地域の教育に貢献している。遠州に報徳を広めた岡田良一郎も、幼いころ美穂に学んだといわれる。また、明治維新の遠州報国隊へも多くの門弟が参加するなど、各方面で活躍した。

○岡田 佐平治（おかだ さへいじ）

文化9年（1812）～明治11年（1878）

文化9年（1812）、現在の掛川市倉真の農家に生まれ、家業を継いだ。佐平治は、乙星耕地報徳社（現在の倉真報徳社^{おとほしこう ちほうとくしや}）を立ち上げ、二宮尊徳から報徳思想を学んだ。そして、尊徳から直接伝授された「農村復興・財政立て直し」のやり方を基に、遠州地方に報徳運動を推し進め、各社の報徳社を誕生させた。明治8年（1875）各地の報徳社を連合させ、浜松に遠江国報徳社を設立し、自らが初代の社長になった。佐平治は社中を統率し、報徳の信念に基づく誠心に溢れた質実剛健の社員を結集していった



岡田佐平治

○小林 源四郎（こばやし げんしろう）

文政11年（1828）～明治21年（1888）

文政11年（1828）、現在の掛川市上内田^{かみうちだ だん}の段の庄屋に生まれた。段村戸長になった源四郎は、村に産業を興そうと考え、茶業に強い関心を持ち、明治5年（1872）、自分の山林^{アール}約100aを切り開き、茶の栽培を始めた。また、小笠山官林^{アール}のうち上内田村が管理していた土地を、家々へ約3aずつ無料で分け与え、切り開いて茶の栽培を始めるよう勧めた。



小林源四郎

明治12～13年（1879～1880）、源四郎は数十名の仲間を集め、茶を買ってくれる所を探し、ついに横浜に直送することになった。また、緑茶の状態が届くよう製茶方法を改善した。明治16年（1883）には、製茶協同組合（益集社）を作り、茶業の発展に力を尽くした。

○岡田 良一郎（おかだ りょういちろう）

天保10年（1839）～大正4年（1915）

天保10年（1839）、岡田佐平治の長男として生まれた。二宮尊徳が開いた二宮塾に嘉永7年（安政元年（1854））に入門、帰郷後は左平治と共に報徳運動を遠州地方に根付かせ、明治8年（1875）の遠江国報徳社の設立に加わっている。明治9年（1876）、佐平治の後を受けて遠江国報徳社の第2代目社長となり、35年間にわたり報徳運動の指導者として、多くの実績を残した。良一郎の力強い指導による活動が盛んであった掛川市は、やがて全国の報徳運動の中心地となり、この地に「大日本報徳社」が設立された。



岡田良一郎

資料：黒田清輝作「岡田良一郎肖像」
（県指定文化財）

一方、明治7年（1874）、事業育成や農業、工業などの産業奨励のために、半官半民の「資産金貸附所」を創設し、岡田家推譲^{すいじょう}※の報徳金や他の推譲金を資産金にして貸し付けを始めた。明治12年（1879）、資産金貸附所の実力を倍加することを目的にして、別に勸業資金積立の組合を作り事業を始めた。これが掛川信用金庫の創始である。

また、明治10年（1877）、倉真村に開いた全寮制の私塾「冀北学舎」^{きほく}は、7年間に152人の卒業生を送り出し、文部大臣岡田良平、宮内大臣一木喜徳郎、東京帝国大学教授山崎寛次郎など多くの優秀な人材が巣立った。県立掛川西高等学校は、冀北学舎を起源とするもので、良一郎は、同校の前身で明治13年（1880）に設置された掛川中学校の初代学校長を務めている。

※推譲…分度のある生活をして、余財を蓄え、家族、子孫、社会のために譲る。

○山崎 千三郎（やまざき せんざぶろう）

安政3年（1856）～明治29年（1896）

安政3年（1856）、6代山崎^{まんえもん}万右衛門の次男として生まれた。山崎家は、江戸時代、掛川藩の御三家（豪商）の一つと言われ、掛川藩の御用達も勤め、藩より士分の待遇を受けていた。浜松、横須賀、相良各藩の資金を用立てていた富豪である。

8代目の山崎千三郎は郷土の発展のため、明治22年（1889）の初代掛川町長に就任した前後を通して、茶再生工場の建設、森・掛川街道の開設、大井川疎水の計画・測量、青^{あお}田坂^{たさか}トンネルの掘削、掛川鉄道設立などに多くの私財を投じ、インフラを整備した。

また、明治13年（1880）に掛川銀行を設立し、金融というソフトのインフラ整備にも取り組んだ。当時、静岡県内には静岡三十五銀行、浜松二十八銀行が既に設立されていたが、掛川では、国立銀行の称号をもつ銀行の設立期限に間に合わなかったため、「掛川銀行」の名称での設立となった。しかし掛川銀行の資本金は千三郎らの努力によって30万円に上った。これは三十五銀行の7万円、二十八銀行の12万円を遥かにしのぎ、全国有数の大銀行となった。



山崎千三郎

○岡田 良平（おかだ りょうへい）

元治元年（1864）～昭和9年（1934）

岡田良一郎の長男として元治元年（1864）に生まれた。明治20年（1887）帝国大学文科大学を卒業した後、明治26年（1893）文部省に入省し、明治34年（1901）菊池大麓^{きくちだいろうく}文相のもとで総務長官となり、専門学校令制定、教科書国定化などに関与した。明治37年（1904）貴族院議員に勅選される。明治40年（1907）京都帝大総長。大正5年（1916）寺内内閣の文相となり、内閣直属の臨時教育会議を設置し、高等教育制度の改革を行なう。

また、加藤高明^{たかあき}内閣、第1次若槻内閣においても文相を務めた。昭和4年（1929）枢密顧問官。この他、大日本報徳社3代目社長、産業組合中央会会頭、東洋大学学長も務めた。



岡田良平

○松本 亀次郎（まつもと かめじろう）

慶応2年（1866）～昭和20年（1945）

慶応2年（1866）^{かみひじかたみねむかい}上土方嶺向に生まれる。静岡師範学校（現在の静岡大学教育学部）を卒業後、明治21年（1888）、静岡高等小学校に赴任し、本格的に教師の道を歩み出した。また、若いときから語学に興味があり佐賀県方言辞典の編集で実力を認められた。明治36年（1903）、^{かのうじごろう}嘉納治五郎が中国人留学生のために設立した^{こうぶん}宏文学院に日本語教師として招かれた。その後、北京の^{けいしだいがくどう}京師大学堂（北京大学）に日本語教授として招かれ、北京に渡る。

帰国後、中国人留学生教育に情熱は移っていたようで、私財を投じ、「^{にっかどうじんきょう}日華同人 共立東亜高等予備学校」を神田区中猿楽町に創立した。亀次郎の教育を受けた中国人留学生には、文豪の^{ろじん}魯迅や中国の首相を務めた^{しゅうおんらい}周恩来をはじめ、これまでの中国の発展を支えた多くの人がいる。



松本亀次郎

○一木 喜徳郎（いっき きとくろう）

慶応3年（1867）～昭和19年（1944）

岡田良一郎の次男として慶応3年（1867）に生まれた。袋井市の一本家に養子として入る。帝国大学を優秀な成績で卒業、28歳の若さで大学教授となり、その後法制局長官を経て大正3年（1914）4月から文部大臣、大正4年（1915）8月からは内務大臣を務め、大正14年（1925）3月から宮内大臣を務めた。また明治33年（1900）9月からは貴族院議員を務め、昭和9年（1934）5月からは枢密院議長を務め、この年には大日本報徳社4代目社長に就任した。昭和13年（1938）、宮内大臣を務めた喜徳郎の強い要請が叶い、取り壊すことになっていた^{こうとくきねんかん}仰徳記念館（旧有栖川宮熾仁親王邸御座所）と^{ありす がわのみやたるひとしんのう}仰徳学寮（旧有栖川宮熾仁親王邸侍女部屋）が宮内省から下賜され、現在も利用されている。



一木喜徳郎

○山崎 覚次郎（やまざき かくじろう）

明治元年（1868）～昭和20年（1945）

山崎千三郎の甥にあたり明治元年（1868）に、山崎家7代山崎徳次郎の長男として生まれた。明治39年（1906）には東京帝国大学法科大学の教授に、大正8年（1919）東京帝国大学経済学部創立のメンバーとなり、大正9年（1920）から大正12年（1923）までは、第2代の経済学部長を務めた。山崎覚次郎の



山崎覚次郎

講義科目は貨幣論と銀行論であり、研究では特に貨幣の価値や貨幣制度の研究に力を注いだ。当時の日本が金本位制のもとにあったにもかかわらず、金本位は単なる名目ではないとの主張を展開し、現在の管理通貨制度への途を拓く役割を果たした。

○吉岡 彌生（よしおか やよい）

明治4年（1871）～昭和34年（1959）

明治4年（1871）、土方村嶺向（現在の掛川市上土方嶺向）の医師鷺山養斎わしやまようさいの家に生まれた。小学校卒業後、花嫁修業として和裁を習っていたが、自由民権運動を知り、医師として働く決意をした。東京の済生学舎に入学し、21才の時、医術開業試験に合格し、日本で27番目の女性医師になった。

医師の仕事をするなかで、彌生は、医師を目指している女子学生のために、明治33年（1900）に夫婦で力を合わせて東京女医学校を作った。最初、いろいろな勉強道具が足りなかったもので、彌生は借金をしたり、夜遅くまで働いたりして、学校を整えていった。

東京女医学校は、明治45年（1912）には東京女子医学専門学校に、昭和27年（1952）には東京女子医科大学になり、今も多くの女性医師を世に送り出している。平成10年（1998）には、掛川市下土方に東京女子医科大学看護学部大東キャンパスが開校し、看護師を目指す学生が全国から集まり学んでいる。



吉岡彌生

○河井 弥八（かわい やはち）

明治10年（1877）～昭和35年（1960）

明治10年（1877）に上張あげはりに生まれた。現在の東京大学法学部を卒業した後、政府の役人となり、昭和13年（1938）河井弥八が貴族院議員の時、中央林業協力会副会長、大日本報徳社副社長となった。このころ弥八は、国力をつけるためには農林業を盛んにしなければならないと考え、とりわけ農業においては食糧不足の時代であったこともあり、食糧増産運動にあたった。また、国土を災害から守る方法を考え、いろいろな所で治山治水対策を行った。小笠山での砂防工事も弥八の指導のもとで行われた。

戦後の日本を立て直す源を報徳精神の普及と考え、食糧増産と治山治水に一層注力した。

昭和28年（1953）参議院議長となり、昭和31年（1956）には、5代目大日本報徳社社長になった。功績が認められ、勲一等旭日桐花大勲章が与えられている。



河井 弥八

○萩原 郁太郎（はぎわら いくたろう）

明治38年（1905）～平成10年（1998）

明治38年（1905）、東山に生まれ、小笠農学校（小笠高等学校）を卒業して、農業に励んだ。昭和15年（1940）、東山富士東茶工場を作り、茶業の発展に尽くした。昭和36年（1961）制定の農業基本法に基づく農業改善事業が進められ、富士東茶工場が事業として行われた。このようななかで、萩原郁太郎は茶の専業農家として製茶の研究を積み重ね、深蒸し茶の普及と品質向上に努めた。

4. 文化財等の分布状況

本市には、平成29年(2017)4月1日現在で、110件の文化財がある。その内訳は、国指定文化財が5件、国登録有形文化財が4件、県指定文化財が31件、市指定文化財が70件となっている。

表 市内指定・登録文化財件数一覧表

	有形文化財								民俗文化財		記念物		計
	建造物	絵画	彫刻	工芸品	書跡	古文書	考古資料	無形文化財	有形民俗文化財	無形民俗文化財	史跡	天然記念物	
国指定	2										3		5
県指定	8	8		3			1			4	1	6	31
市指定	16	4	5	4	4	6	1		1	2	10	17	70
国登録	4												4
計	30	12	5	7	4	6	2	0	1	6	14	23	110

(1) 国指定文化財

① 掛川城御殿（建造物）

掛川城二の丸の御殿は、嘉永7年(安政元年(1854))の大地震で倒壊した後、文久元年(1861)に城主太田資功^{すけかつ}によって再建された。城郭附属の御殿建築として、全国的にも数少ない遺例であり、広間、書院の主要部だけでなく、小書院や諸役所まではほぼ全体が残っているのは珍しい。



掛川城御殿

② 旧遠江国報徳社会堂（建造物）

旧遠江国報徳社会堂（大日本報徳社大講堂）は、掛川城の北東に、二宮尊徳の教えを体系化した報徳思想を普及・啓蒙する中心拠点として明治36年(1903)に建設された。公会堂は、正門の奥に東面して建ち、木造2階建て、上層入母屋造り棧瓦葺で、伝統的な木造建築の形式・技法によりながら、1階が和風、2階が洋風の特徴ある外観を持つ。



大日本報徳社

③ 高天神城跡（史跡）

高天神城は鶴翁山（かくおうざん 標高 130m）に築かれ、現在も東峰の本丸跡など主要郭の跡や空堀などを見ることができる。諏訪原城跡と並んで、戦国期の過程を理解する上で逸することのできない遺跡であり、中世山城の遺構としても秀れている。



高天神城跡

④ 横須賀城跡（史跡）

天正3年(1575)長篠合戦の勝利をうけて、同6年(1578)、高天神城奪還を企む徳川家康（当時浜松城に在城）が大須賀康高に命じて築城した。遺構としては丘陵上の天守台、本丸、松尾山北東の大空濠などがよく残っている。城郭の北、西、南を画する堀跡があり、玉石積の石垣遺構がよく残っている。また隠し堀といわれる舟入状の堀跡は、入江に面し横須賀港をおさえていた横須賀城の特色をよく示している。武田方の諏訪原城、武田・徳川方の争奪地となった高天神城とあわせ、武田方の進出と衰亡、徳川氏の成長過程を示す貴重な史跡である。



横須賀城跡

⑤ 和田岡古墳群（史跡）

和田岡古墳群は、西部和田岡地区に所在する5世紀前後に築造された古墳群の総称で、原野谷川が形成した河岸段丘上に立地している。この段丘上の南北約2.5km、東西約1kmの範囲の中に、前方後円墳4基、円墳16基、方墳3基が確認されており、東遠地域における一大中期古墳群を形成している。最大の古墳である各和金塚古墳は、かくわかなつかこふん 副葬品の年代から、5世紀初頭に造られた首長の墓と考えられている。



和田岡古墳群（吉岡大塚古墳）

(2) 国登録有形文化財

① 天竜浜名湖鉄道^{はらのやがわ}原野谷川橋梁（建造物）

浜名湖の北側を通る 67.7km の天竜浜名湖鉄道は、国鉄二俣線として昭和 10 年(1935)から昭和 15 年(1940)にかけて敷設され、平成 23 年(2011)には全線にわたって 36 施設が国の登録有形文化財となっている。この橋梁はそのなかの一つで、原野谷川に架かる橋長 105m の銅製橋梁である。昭和 9 年(1934)に、日本橋梁株式会社と株式会社横川橋梁によって製作されたものである。



天竜浜名湖鉄道原野谷川橋梁

② 天竜浜名湖鉄道^{はらのや}原谷駅本屋（建造物）

木造平屋建の建物で、昭和 10 年（1935）に建設された。現存する建設当初の木製改札口は、今は滅多に見ることもない太い木材で作られている。天井は小幅板の鏡張り、背面下屋を支える頬杖が連子状になり特徴的である。



天竜浜名湖鉄道原谷駅本屋

③ 天竜浜名湖鉄道^{さくらぎ}桜木駅本屋及び上りプラットフォームホーム（建造物）

木造平屋建の建物で、昭和 10 年（1935）に建設された。外壁を上部漆喰壁の下見板張とする簡易な意匠である。改札口には当初の片引き木製建具、待合室には駅務室の切符売場が突き出し、西面には当初のベンチが残存する。



天竜浜名湖鉄道桜木駅本屋及び上りプラットフォーム

④ 天竜浜名湖鉄道^{とんべ}富部橋梁（建造物）

桜木駅の 400m 東に位置し、家代川の 3 本の支流が合流する地点に架かる。橋長 21m、単線仕様の鋼製 4 連桁橋で全体にわずかな曲線を描く。橋脚及び橋台は鉄筋コンクリート造。昭和 10 年（1935）に建設された。



天竜浜名湖鉄道富部橋梁

(3) 県指定文化財

① 龍華院大猷院霊屋 附 春日厨子

明暦2年(1656)、掛川城主北条氏重が、3代将軍家光(大猷院殿)の霊を祭るために建立した。文化15年(1818)掛川大火により類焼したが、霊牌と春日厨子は運び出されて難を逃れた。この時城主太田資始の手により文政5年(1822)往時の様に再建されたのが現在の建物である。

3間(約5.5m)四方の方形造り、^{さんかわらぶ}棧瓦葺きで、南側に1間の向拝が付けられている。小規模だが権現造りの東照宮社殿を連想させるきらびやかさを保っている。往時は^{こけら}柿葺きの建物で、正面に唐門があり、回りを透かし塀が囲んでいた。

昭和29年(1954)1月30日に県の文化財(建造物)に指定された。

なお、この霊廟は現掛川城以前の掛川古城に建てられたもので、現掛川城が「龍頭山」、掛川町の氏神社龍尾神社は「龍尾山」と呼ばれ、この霊廟が建つ掛川古城は龍の胴部にあたり、尊い場所となっている。



龍華院大猷院霊屋附春日厨子

② 三熊野神社本殿(建造物)

江戸時代を代表する建築の流派、諏訪立川流の名人立川(宮坂)昌敬により、安政2年(1855)に建てられた。文武天皇の皇后に由来する荘厳なたたずまいの神社で、横須賀城が築城されると、歴代城主、家臣、近隣の人々の深い信仰を集めた。



三熊野神社

③ ^{たんざんおう}淡山翁記念報徳図書館(建造物)

大日本報徳社2代目社長であった岡田良一郎(淡山)の多大な遺徳を記念し、昭和2年(1927)に建てられた。鉄筋コンクリート造り・タイル貼り仕上げで、建築学的に見ても、往時の図書館様式を今に伝える貴重な建造物である。県内最古の民間図書館であり、昭和27年(1952)から昭和44年(1969)まで市立図書館として使われた。



淡山翁記念報徳図書館

④ 大日本報徳社正門（建造物）

明治42年(1909)に建立された石造の門で、支柱に「経済門」、「道徳門」の文字が刻まれている。

道徳と経済の調和した社会づくりをめざす、報徳の教えを象徴している。



大日本報徳社正門

⑤ 旧遠江国報徳社第三館掛川事務所（大日本報徳社^{きほくがくしゃ}冀北学舎）（建造物）

明治10年(1877)に、現在の掛川市倉真に岡田良一郎が開いた私塾「冀北学舎」に使われていた建物である。明治32年(1899)に「遠江国報徳社第三館掛川事務所」として、現在の大日本報徳社に移築された。



旧遠江国報徳社第三館掛川事務所

⑥ 獅子舞 かんからまち（無形民俗文化財）

3年に一度の掛川大祭の年だけに登場する、2頭の雄獅子と1頭の雌獅子が一組になって舞う獅子舞。荘厳な舞曲にあわせて勇壮な舞が演じられる。舞とともに笛の音も固有のもので、獅子頭や衣裳などを昔のままだに伝えている。

神事で、神輿^{とぎよ}渡御の際に神輿の先を進み、露払いの役を担う。また、路上を進行する際に、獅子を先導する花唄は美しく、行列に華やかさを加えている。



獅子舞かんからまち

⑦ ^{さんじゃさいれいばやし}三社祭礼囃子（無形民俗文化財）

毎年4月の第1金曜日から日曜日に開催される三熊野神社大祭で囃される祭囃子で、大間、屋台下など6曲がある。曳かれる祢里は江戸天下祭りの流れを継ぎ、囃子道具として小太鼓2、大太鼓1、すり金1、特一本調子の篠笛2が用いられる。これにつく「おかめ」「ひょっこ」の手古舞が滑稽である。



三社祭礼囃子

⑧ 八坂神社の祇園囃子と祭礼行事（無形民俗文化財）

毎年10月の第1土日に行われる八坂神社の祭典は、本殿から^{あおや}青谷と呼ばれる御旅所（御仮屋）にご神体が里帰りし、また戻られるという一連の流れである。また、満勝寺住職の祈祷を受けたり、^{かみしも}袴での警護役がついたり、古式の伝統が色濃く残っている。



八坂神社の祇園囃子と祭礼行事

⑨ 三熊野神社の^{じがた}地固め舞と^{たあそ}田遊び（無形民俗文化財）

水田耕作が始まる前の季節に、神前で耕作の様子をあらかじめ演じることによりその年の豊穰を祈願する民俗芸能。三熊野神社大祭のなかで舞われている。



三熊野神社の地固め舞

⑩ 手揉製茶技術（無形民俗文化財）

手揉製茶技術とは、茶葉を蒸した後「^{ほいろ}焙炉」と呼ばれる丈夫な和紙を張ったホットプレートのような専用の台の上で、手で茶葉をほぐしながら揉み、乾燥させる作業のことである。手揉製茶技術は、静岡県が無形民俗文化財に指定され、公益社団法人静岡県茶揉保存会茶匠会が保護団体として活動し、市内では掛川支部と^{おおしろ}大城支部が所属している。



手揉製茶技術

(4) 市指定文化財

① 横須賀町番所（建造物）

横須賀町番所は、藩の役人が横須賀城地内に入出入りする人を監視する目的で、横須賀城南に接した町との出入口近くに造られた。その後、明治維新とともに横須賀城は廃城となったが、この町番所の建物だけは奇跡的に残った。古材から安政3年(1856)に建てられた建物であることがわかっている。建物の屋根の大棟とおおむねすみむねには、城主西尾氏の紋所である「櫛松」を表した鳥くしまつ衾とりぶすまつき付の鬼瓦が置かれ、小規模ながら威厳を示している。



横須賀町番所

② 大手門番所（建造物）

掛川城内に入出入りする者を監視する役人の詰め所として江戸時代末期に建てられた。掛川宿と掛川城とを連絡する唯一の番所で、城内に入出入りする者は全てここで調べられた。現在残されている建物は、嘉永7年(安政元年(1854))の大地震で倒壊後、安政6年(1859)に再建されたものである。番所が現存するのは全国的にも珍しい。



大手門番所

③ 掛川城落^{ふき}の門（建造物）

掛川城内堀（蓮池^{はすいけ}）畔にあった四脚門で、明治5年（1872）に西町の円満寺^{にしまち えんまん じ}に払い下げて移築。移築の際、柱の下方2尺5寸（約76 cm）切り取った状態で寺の山門とした。軒丸瓦には太田氏の桔梗^{ききょう}、松平氏の九曜星が見られ、昭和35年(1960)5月31日に市の文化財に指定されている。



掛川城落の門

④ ^{ほんげんじ} 本源寺山門（建造物）

本源寺は、11代目横須賀城主の井上正利（城主期間：寛永5年(1628)～正保2年(1645)）が父である10代正就の菩提を弔うため寛永5年(1628)に開基した。山門は、横須賀城の搦手門を移築したと伝えられ、江戸時代中期頃の形式を残している。



本源寺山門

⑤ ^{せんようじ あかずのもん} 撰要寺不開門（建造物）

撰要寺は初代横須賀城主の大須賀康高により天正9年(1581)創建された。大須賀家の菩提寺であり、江戸時代、寺の格式は10万石で、遠州一の寺格であったといわれる。山門は横須賀城から移築された門で、城内にあった時は死者や罪人を出した不浄門であったことから、^{あかずのもん}不開門と呼ばれる。



撰要寺不開門

⑥ ゲイスベルト・ヘンミイ墓（建造物）

旧オランダ東インド会社の商館長で寛政10年(1798)3月に將軍家斉に謁見し、4月に掛川宿本陣へ投宿。24日に死去、25日に天然寺に葬られた。墓石は蒲鉾形で、当時のオランダ人墓の意匠を現在に伝える。



ゲイスベルト・ヘンミイ墓

⑦ 竹の丸（旧松本家住宅）（建造物）

松本家は江戸時代より続く葛布問屋で、掛川藩御用達を務めた豪商である。主屋は明治36年(1903)に築造され、桁行9間半、梁行7間の平屋建て寄棟造り建物である。離れは大正末期から昭和初期にかけて二階部分が増築されている。離れ二階の貴賓室には、壁板と板戸に杉の一枚板を使用し、壁紙には葛布が使われる等近代豪商住宅の様相を今に伝える貴重な建造物である。



竹の丸

⑧ 旧日坂宿旅籠「川坂屋」(建造物)

日坂宿の旅籠屋で、江戸時代の面影を遺す数少ない建物の一つである。江戸より招いた棟梁の手で、精巧な木組みと細やかな格子が造作されたといわれている。身分の高い武士や公家などが宿泊した格の高い脇本陣格であったことが伺える。旅籠屋としては、明治3年(1870)まで存続していたようだが、以後も要人には宿を提供していたともいわれている。



川坂屋

⑨ 旧日坂宿旅籠「川坂屋」茶室(建造物)

文化2年(1805)、掛川城主太田資順が掛川偕楽園(掛川市久保)に建て、その後掛川城内に移築された。明治初期、太田侯が掛川城を離れるに伴い旧東海道日坂宿川坂屋に譲られた。戦後、解体され保管されていたが、平成15年(2003)に当初の状态に再建された。床の間の壁は本市特産の葛布を使った「葛壁」で、床柱には大変珍しいツツジの巨木が使われている。



旧日坂宿旅籠「川坂屋」茶室

⑩ 久延寺境内(史跡)

小夜の中山峠の中腹に位置する古刹。慶長5年(1600)大阪から会津の上杉景勝攻めに向かう徳川家康を、掛川城主山内一豊が茶亭を設けてもてなした茶亭の跡地や、その礼に家康が植えたと言われる五葉松の跡が残されている。夜泣き石、蛇身鳥などの伝説にまつわる寺としても知られている。



久延寺境内

⑪ 松ヶ岡(旧山崎家住宅)(建造物)

十王区にある松ヶ岡は、安政3年(1856)に建てられた掛川藩の御用商人山崎家の住宅で、厳選された建築材料と丁寧な加工が施されている。庭園には池(堀)や多くの灯籠、沓脱の鞍馬石のほかに、「松ヶ岡」の名の由来となった多くの赤松が残って



松ヶ岡 長屋門と「行在所」の石碑

いる。また、長屋門の右には「明治天皇掛川行在所」という石碑が残っており、明治11年(1878)明治天皇の北陸東海御巡幸時に行在所(宿泊所)として提供された事を伝えている。

⑫ 大渚のさなぶり(無形民俗文化財)

初夏の早朝、子供達が民家を訪ね歩き、豊作祈願やお祓いをする行事で、大渚8地区ごとに唱えごとが違う。一般的に「さなぶり(早苗饗)」とは、田植えを終えた祝いのことだが、大渚地区での「さなぶり」は、本格的な夏を迎える前に厄を払う神事の意味が強いと言われている。



さなぶり

⑬ 晴明塚(史跡)

陰陽師安倍晴明の伝説が残る赤い石を積んだ塚で、村人に祭られ、今に伝え残されてきた。約1千年前、京に住む晴明が荒波で有名な遠州灘に面した大渚の地に立ち寄り、村人の乞いに応じて、津波防止のために、小豆色の小石を積み上げて熱心に祈祷した。その霊験により、以後この村には津波の災難がなくなったと言われ、村人は自然の暴威を鎮めた晴明の徳をたたえてここに祀り、晴明塚と称するようになった。



晴明塚

その後、晴明塚は人々の心の拠り所となり、晴明塚に祈願すると^{ほうそう}疱瘡にかからないと信じられ、往年その流行期に遠近から多数の参詣があった。疫病予防のためには、赤い石1個を借り出し、お礼の時に2個にして返す慣わしがあり、返した石がどんな色の石でも小豆色に変わると伝えられ、遠州七不思議の一つに数えられている。

⑭ 城主西尾氏の墓塔(龍眠寺)(史跡)

龍眠寺は、明応5年(1496)に創建され、境内には13代目横須賀城主西尾忠成から第19代城主忠受などの9基の墓塔が残されている。



城主西尾氏の墓塔

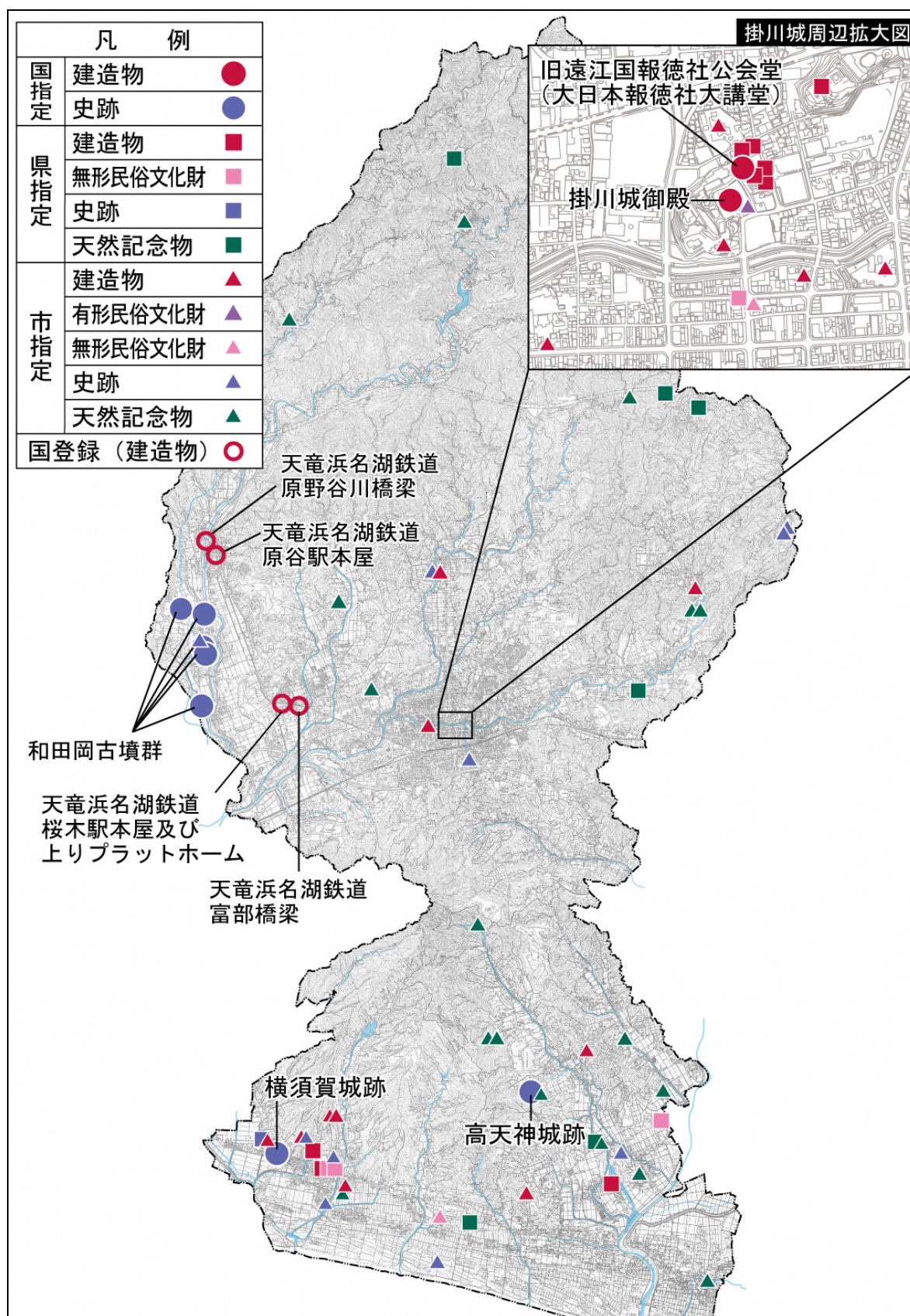


図 掛川市の文化財分布図

(5) 主な未指定文化財

① 歴史的建造物

【掛川城天守閣】

掛川城天守閣は、外観3層、内部4層から成る。白漆喰の真っ白な外観は京都聚楽第の建物に、黒塗りの廻縁・高欄は大阪城天守閣にならったと考えられ、天守閣の美しさは「東海の名城」と謳われた。高知城は掛川城を模して作られたとも伝えられている。嘉永7年(安政元年(1854))の大地震で大半が損壊し、再建されることなく明治2年(1869)に廃城となった。現在の掛川城は、平成6年(1994)4月に、日本初の「本格木造天守閣」として復元された。



掛川城天守閣

【清水邸庭園】

清水家は江戸元禄時代に回船問屋を営み、藩の御用達を勤めるなどして栄えた旧家である。屋敷の南に広がる回遊式庭園は江戸中期に造られたものといわれ、「静岡のみずべ100選」に選出されている。



清水邸庭園

【ことのまま事任八幡宮】

えんぎしきじんみょうちょう
延喜式神名帳に載る神社(式内社)。由緒には、大同2年(807)坂上田村麻呂が勅令を奉じて再興した。嘉祥3年(850)従五位下の神符が贈られ、貞観2年(860)には正五位の神階が贈られている。

古くから、「願い事のままだに叶う」というありがたい神社として、平安時代の清少納言の「枕草子」や鎌倉時代中期の歌人阿仏尼の「十六夜日記」など、多くの紀行文に登場する。東海道を往来する人々が参詣した。



事任八幡宮

^{たつお}
【龍尾神社】

厄除け開運に靈驗あらたかな古社で、掛川城の北東（鬼門）に位置するため、その守護神として、山内一豊をはじめとする歴代城主から篤く崇敬を受けた。



龍尾神社

^{よろずや}
【萬屋】

萬屋はもっぱら庶民の泊まる旅籠で、1階が「みせ」や「帳場」で、2階が宿泊のための「座敷」というごく普通の店構えである。

日坂宿は嘉永年間に大火災に遭い、萬屋の土間下からも当時の焼土が見られ、それを裏付けている。



萬屋

^{ふじぶん}
【藤文】

日坂宿最後の問屋役を務めた伊藤文七の自宅で、「藤文」は屋号である。文七は安政3年(1856)に日坂宿年寄役となり、万延元年(1860)から慶応3年(1867)にかけて日坂宿の問屋役を務めた。



伊藤文七邸「藤文」

^{たいらのまさかどじゅうく しゅづか}
【平 将門十九首塚】

天慶3年(940)、藤原秀郷が平将門一門19名を討伐してその首を吊った塚と伝えられており、昔は19基あったものが時代とともに減ってゆき、将門のものと思われる大きな1基だけが残されたといわれている。平成20年(2008)3月28日、将門の首塚を取り囲むようにして18基の首塚が新しく作り直さ



十九首塚

れた。地元では首塚を町の守り神として、彼岸と命日にあたる8月15日に供養祭が行われている。

なお、首塚のある十九首の地は、万治2年(1659)掛川藩主となった井伊直好い い なおよしの祖父井伊直親い い なおちかの終焉地と言われている。

【高天神六砦】

徳川家康が、高天神城包囲攻撃のために築いた砦で、小笠山砦の が さか、能ヶ坂砦ひ が みね、火ヶ峰砦し し が はな、中村砦みつ い ざん、獅子ヶ鼻砦、三井山砦の6つの砦をいう。



能ヶ坂砦遠景



獅子ヶ鼻砦全景



三井山砦全景

② 静岡県景観賞受賞地区

県、一般社団法人静岡県建築士事務所協会及び公益社団法人静岡県建築士会などで構成する「美しいしずおか景観推進協議会」により、県内において優れた景観を創出している地区など、市内の歴史を感じさせる風景が表彰されてきた。

受賞地区など	写真	特徴
加茂荘		歴史的な面影を残す建物と菖蒲園が一体となり、自然や文化の雰囲気を享受できる魅力的な景観形成が図られている。
秋葉路		既存の山林や樹木を保存しつつ、地区計画や緑地協定などにより、地区全体に景観に対するきめ細かい配慮がされている。

掛川城と城下町 風街づくり		天守閣を、市民の寄付など市民総ぐるみで本格木造によって復元し、まちのシンボル景観を創出した。周辺市街地においても城下町風街づくりが推進され、城と調和のとれた街並み景観が広がっている。
掛川・旧東海道の清水銀行		旧東海道筋に面し、掛川市城下町風景づくり地区計画の重点地域に位置し、この地区計画のテーマである「にぎわいと伝統の調和した風格あるまち」に沿って建てられている。
日坂宿「川坂屋」と旧街道筋		東海道五十三次の25番目の宿場として栄えた旅籠を修復・保存した建物である。高札所を復元し、各戸には屋号を記した看板がある。
報徳図書館と市立中央図書館		市立中央図書館は、蓮池に沿って建てられ、来訪者が利用しやすく、また歴史文化を感じさせるたたずまいを見せている。報徳図書館は県内最古の民間図書館であり、当時のアール・デコ様式でデザインされた建物を修復したものである。
緑のもてなし空間二の丸茶室		伝統的な数奇屋造りの建物。周囲の天守閣や御殿、太鼓櫓などの歴史的建築と調和した落ち着いたたたずまいを見せ、南側の野点のできる緑豊かな庭が開放的な空間を作り出している。
緑の風を次世代に伝える「とうもんの里」		とうもんの里は、豊かな自然と農業に培われた歴史、昔から受け継がれてきた伝統や文化などを、未来の子供たちへ継承することを目的として整備された。NPO法人とうもんの会が、地区の農業や農村の歴史と文化を紹介している。

天浜線のある風景（文化資源を際立たせる自然・産業景観）		天竜浜名湖鉄道（天浜線）は、旧国鉄二俣線を引き継ぎ、地域の熱い思いにより誕生した第三セクターのローカル鉄道である。昭和15年(1940)当時の歴史的・文化的鉄道施設を現在も使用している。
遠州灘沿岸の「斜め海岸林」		掛川市から御前崎市の沿岸約12kmの区間では、冬の冷たく激しい季節風（西風）「遠州の空っ風」による飛砂から農地や宅地を保護するため、江戸時代末期以降、海岸線に対して斜めに形成された自然堤防上に植林して海岸林を設けた。国内唯一の景観となっている。
遠州横須賀のまちづくり		「遠州横須賀倶楽部」は、横須賀地区の街並みを守る活動を柱とし、古民家開放や街並み散策などを行なっている。活発な活動により、家の改築時に前面を城下町風の意匠にするお宅も増えている。

③ 祭り・民俗芸能

【掛川祭・三大余興】

毎年10月上旬に、7つの神社の氏子41町が参加する合同祭礼として行われる。獅子舞文化と曳山文化、花柳文化が混然一体の祭りで、3年に一度掛川大祭として開催され、「かんからまち」、「大獅子」、「奴道中」が登場する。



瓦町「かんからまち」



仁藤町「大獅子」



西町「奴道中」

【事任八幡宮例大祭】

事任八幡宮例大祭は、毎年9月に3日間開催される。祭典の2日目には本祭が行われるとともに各町の屋台が神社に集結し、大笛祭が催され祭囃子が奉納される。大笛祭では、各町内（8町）が



事任八幡宮例大祭

順に笛や太鼓、踊りなどお囃子を披露する。最終日の神輿渡御も祭りの見どころである。「そらやれ」の熱気あふれる掛け声とともに、華やかに祭りが繰り広げられる。

【小笠神社の^{やはぎさい}矢矧祭】

毎年11月に小笠神社で行われる矢矧祭は、五穀豊穰、家内安全、安産を祈願する祭りで、神事では、神主が桑で作られた弓で、竹の破魔矢を8本放つ。その矢を拾うと1年間無病息災で過ごせると言われ、参加者は競って取り合う。その後、参加者には別の矢が配られ、その矢は多聞天神社に奉納される。また、多聞天神社へ向かう樽御輿、稚児舞奉納などが、古式ゆかしい伝統の祭りを華やかに彩り、普段は静かな小笠山山頂ににぎわいをもたらす。



小笠神社の矢矧祭

【高天神社例大祭】

毎年3月の最終日曜日に執り行われる例大祭で、西の丸にある現在の社殿から、かつてあった本丸東側御前曲輪の元宮に里帰りする行事として行われている。当日は、神楽の奉納や神輿渡御行列などの神事が厳かに行われる。

今は途絶えているが、毎年1月15日小豆粥の中に管104本を立て、神前に供えてその年の豊作物の豊凶を占う「管^つ粥の神事」という特殊神事があった。



高天神社例大祭

【ちいねり】

毎年9月中旬の土・日曜日に、横須賀地区で行われる子ども達だけの祭り。準備から、お囃子、舞の稽古、当日の運営にいたるまでを14町の中学生が主体となって行われる。祢^ね里は、大祢里より小型であるが同様の形で、春の三熊野神社大祭さながらに横須賀の町で曳きまわされる。もとは、各氏神様のお祭りで、三熊野神社大祭の様な神事は行われないが、各氏神様への挨拶をし、日曜日には、東から西へ練り歩き、三熊野神社にて千秋楽を迎える。



ちいねり

(6) 特産品、工芸品、菓子・料理等

① 掛川茶

本市の茶生産量は県内トップクラスである。特産となっている深蒸し煎茶は、普通煎茶よりも蒸し時間が長く、味も色も濃くなる。まず一番茶の生産が4月下旬から5月にかけて行われ、二番茶、三番茶の生産が10月上旬頃まで続き、市内はさわやかな香りに包まれる。

全国茶品評会の蒸し煎茶の部では通算20回（平成29年（2017）時点）の産地賞を受賞している。



掛川高級ブランド茶「天葉」

② 子育て飴・飴の餅

もち米と大麦を原料にした水飴で、「夜泣き石」の伝説に登場する。江戸時代には飴の餅^{あめもち}といって、餅の中に水飴を包んで出すものだった。丸めた餅を薄く伸ばして焼き、その上に水飴を塗ったものだったという説もある。江戸後期には中山峠から菊川、牧ノ原にかけてたくさんの茶店があって、飴の餅を売っていた。文政9年(1826)、オランダ商館長に従い江戸まで旅行をした帰りのシーボルトの記録に「伝説の山、日坂峠を歩き、峠の茶屋で茶を飲み、飴を食べて、元気を取り戻した。」とある。口に入れると優しい甘味の広がる素朴な味わいは、小夜の中山名物として親しまれている。子育て飴は、小夜の中山トンネル脇の「小泉屋」と久延寺近くの「扇屋」で現在も昔ながらの製法でつくられている。



「扇屋」の子育て飴

③ わらび餅

日坂名物のわらび餅は、わらびの地下茎を叩きほぐして洗い出し、精製したデンプンの粉から作った餅で、戦国時代には名物となっていた。掛川城主であった山内一豊が、徳川家康をお茶とわらび餅でもてなしたと伝えられている。後には葛の粉で餅を作り、豆の粉をまぶして旅人に勧めたと江戸時代初期の林羅山^{はやし らざん}が紹介している。日坂では昭和初期まで



掛川茶わらびもち
資料：掛川茶商協同組合 HP

売っていた。

現在、掛川菓子工業組合では、古くから掛川で作られてきた伝統的なわらび餅に掛川産のお茶を加えた創作菓子「掛川茶わらびもち」を各店毎に開発し、販売している。

④ よこすかしろ

南部地域は江戸時代から続くサトウキビの産地である。「よこすかしろ」は、サトウキビの搾り汁を、丁寧に灰汁を取り除きながら、時間をかけて煮詰めて結晶化させる伝統製法でつくる。白砂糖に比べ、たんぱく質やカルシウム、鉄分、カリウムなどの栄養素が多く含まれている。



よこすかしろ

⑤ 葛布（かつぷ・くずふ・くずぬの）

「これもこの ^{ふじわらのためすけ}ところ習いと門毎に 葛てふ布を掛川の里」(藤原 為相、室町時代)と、歌にも詠まれた葛布は、山形、新潟の科布^{しなふ}、沖縄の芭蕉布^{ばしょうふ}と並んで、日本三大古布の一つと呼ばれ、掛川市の特産品として全国に伝わり、現在も市内2店舗で作られている。



葛布織り

葛のつるから繊維を取り、織り上げて布にするもので、地元では「かつぷ」とか「くずふ」と呼ぶ。葛つるの採取・煮立て、ぬめり取り、葛芋仕上げ（繊維を作る）、葛芋干し、葛つぐり（繊維を1本の糸に仕上げる）、葛布織りなど、すべて手作業で行う。



葛つるの煮立て

掛川の葛布づくりは、鎌倉時代から製法が受け継がれているもので、江戸時代に編纂された『和漢三才図会』^{わかんさんさいずえ}には掛川の名産だったことが記されている。掛川藩主太田家が葛布生産を奨励し葛布織りは産業として盛んになり、^{かみしも}袴、陣羽織、袴や合羽など武家を相手に珍重され全国に広まった。明治時代後半になると、ふすま地、壁紙として使われ、アメリカ、イギリス、フランスなど西欧先進諸国に多く輸出された。昭和55年(1980)には静岡県郷土工芸品に指定されている。

平織りした葛布は、光沢があるとともに、自然素材の温かさと手作りの味わいがあり、現在でも、草履やハンドバッグなどの小物のほか、掛け軸、ふすま紙、ブラインドやカーテンなどのインテリアに加工・販売され、特にインテリアはアメリカなど海外でも人気が高い。

⑥ 掛川^{ちょうくず}丁葛

丁葛（葛粉）は、遠州地方の深山に自生する葛根より、寒期に精製した純正でん粉である。葛湯は、葛粉に熱湯を注いで食べる素朴な食べ物で、体が温まるため、風邪をひいたときに飲まれている。また消化が良いので、二日酔いや胃腸を壊している時などに好んで飲まれている。



創業100年を超える葛湯製造店



葛湯

⑦ 自然薯^{じねんじょ}・いも汁

本市の山間部では昔から自然薯が採れ、自然薯を使った料理が生活のなかでの伝統的な文化食として息づいている。皮ごとすりおろし、鯖だしの味噌汁を加えるのが掛川流のいも汁で、秋になると親戚や友人などで集まり、「いも汁会」を開くなどして親しまれている。



掛川いも汁

⑧ あたらしたようかん 愛宕下羊羹

愛宕下羊羹は、初代の中田和吉が明治40年(1907)に羊羹専門店を開業し、地名の愛宕下から名付けたことに始まる。創業以来一貫した製法で作られ、今となっては珍しく、包装せずに裸のままでケースに陳列して販売をしている。愛宕下羊羹は、硬めでしっかりとした食感と上品な甘さが特徴で、その素朴で大切に守られている味にはファンが多い。



愛宕下羊羹

⑨ 地酒

市内横須賀地区にある山中酒造は、文政年間(1818～1829)に現富士宮市で酒造業を始めた、近江商人である山中正吉が水量豊富で良質な伏流水を得られる土地を求めて、横須賀の町に蔵を構えた。昭和4年(1829)に山中酒造として独立し、万延元年(1860)築造の酒蔵にて今も酒造りを続けている。

大東地区土方の土井酒造場では、掛川市街より南に8kmほど山あいであって、明治5年(1872)創業以来酒造りを続けている。明治に建てられた蔵が残る建物群が、歴史の風格を感じさせる。土井酒造場で作られる「開運」は、高天神城の湧水で仕込まれた、柔らかい口あたりの美酒である。「開運」という銘柄の名前は、地元小笠郡小貫村の発展を祈って創業時に付けられ、地元の名産品になっている。



土井酒造

⑩ 横須賀凧

横須賀凧はユニークな形と色彩が特徴である。その歴史は古く、戦国時代、武田方と徳川方による高天神合戦の際に、敵の陣地の測量や通信手段などに利用されたのが、その始まりといわれる。

横須賀凧が祝凧として多彩になったのは江戸時代になってからで、14代目横須賀城主西尾忠尚の加増を祝って、家臣たちが凧を揚げたことに由来すると伝えられる。正徳年間(1711～1715年)には、城下町の庶民も凧を揚げるようになり、人々が競って凧揚げを行なった結果、様々な意匠のものが誕生した。



横須賀凧 (右が巴凧)

凧の種類は、巴、とんがり、べっかこう、ぶか、奴など 20 種類以上もある。巴凧は、上部に初代横須賀城主・大須賀康高公率いる徳川方の「三つ巴」、中段に武田方の菱紋、遠州灘の荒波と風紋、下段に徳川家康の軍扇を配し、遠州灘のこの地で徳川方が武田方を挟み撃ちにしている様子を表しているといわれている。

